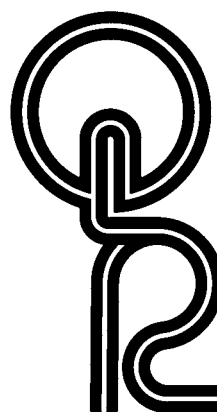


QR Newsletter



第四紀通信

Vol. 16 No.2, 2009



トルコ国アナトリア高原のカップパドキア（1985年世界遺産に登録）。円錐形や煙突の形をした岩は中新世～鮮新世の凝灰岩や溶岩が侵食されたもの。（副田宜男撮影）

Vol. 16 No. 2

April 1, 2009

地球惑星科学連合大会プログラム・・・ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2	電子アーカイブ化・著作権譲渡告知・・・ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
2009年大会案内（第2報）・・・・・・5	幹事会議事録・・・・・・・・・・・・・・22
学会賞・学術賞記念講演会報告・・9	紙碑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
学会賞・学術賞記念講演会および シンポジウム案内・・・・・・・・・・10	会員消息・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
講習会報告・・・・・・・・・・・・・・11	地質標本館 春の特別展・・・・・・・・25
シンポジウム報告・・・・・・・・・・・・11	第53回粘土科学討論会開催案内・26
国際ワークショップ報告・・・・・・・・13	富山大学公募・・・・・・・・・・・・・・26
学術会議 INQUA 分科会議事録・・15	三宅賞・奨励賞 候補者募集・・・・27
評議員会議事録・・・・・・・・・・・・・・16	Active Tephra in Kyushu 案内・・・・27
	東京地学協会 IYPE 記念行事案内・28

◆日本地球惑星科学連合 2009 年連合大会プログラム

日本地球惑星科学連合 2009 年連合大会が下記のとおり開催されます。2009 年連合大会には約 3000 件の発表が申し込まれ、6 日間の会期で開催されます。日本地球惑星科学連合が発足して満四年、法人化後はじめての開催となりますが、地球惑星科学を学際的に盛り上げていく場として合同大会の意義は一層重要となります。みなさまの積極的な参加を期待しています。

期 日：2009 年 5 月 16 日(土)- 21 日(木)

場 所：幕張メッセ国際会議場

大会詳細：<http://www.jpogu.org/meeting/index.htm>

確定プログラムプログラム web 公開：2009 年 4 月 6 日

各セッションの日程と会場は上記大会ウェブサイトで確認できます。

事前参加登録(割引料金)締切：2009 年 4 月 10 日(金)正午

第四紀関連オーラルセッション(一部抜粋)

日	時 間	セッション名	会場
5 月 16 日	13:45 - 17:00	J242 : サンゴ礁：生命・地球・人の接点	101
5 月 16 日	15:30 - 17:00	G121 : 堆積物・堆積岩から読みとる地球表層環境情報	301B
5 月 18 日	9:00 - 17:00	U054 : 古環境科学の統合と地球環境の将来予測	302
5 月 19 日	9:00 - 12:15	L136 : 海と陸の気候—過去から現代までの変動解明へのアプローチ	ファンクションルーム A
5 月 19 日	9:00 - 15:15	Z176 : 地形	展示ホール 7 別室
5 月 19 日	10:45 - 12:15	Y167 : 地質ハザード・地質環境問題	202
5 月 19 日	13:45 - 17:00	Y229 : 地すべりダムとせき止め湖：形成から発展、消滅まで	202
5 月 19 日	15:30 - 17:00	L216 : 低緯度域の気候変動と間接指標の開発	ファンクションルーム A
5 月 19 日	15:30 - 17:00	X228 : 地考古学	展示ホール 7 別室
5 月 20 日	9:00 - 10:30	X165 : 人間環境と災害リスク	202
5 月 20 日	9:00 - 12:15	L135 : 古気候・古海洋変動	ファンクションルーム A
5 月 20 日	13:45 - 17:00	W164 : コア研究が拓く地球環境変動史	ファンクションルーム A
5 月 21 日	9:00 - 12:15	Q145 : 第四紀	ファンクションルーム A
5 月 21 日	9:00 - 12:15	T225 : 連動型巨大地震	国際会議室
5 月 21 日	10:45 - 12:15	J232 : 活断層と地震災害軽減	304
5 月 21 日	13:45 - 17:00	S147 : 活断層と古地震	国際会議室
5 月 21 日	13:45 - 17:00	Q146 : 沖積層研究の新展開	ファンクションルーム B

各セッションのポスター発表は、ポスター共通コアタイムとして、17:15-18:45 に設定されていますが、セッションによっては共通のコアタイムとは別の時間帯にコアタイムが設定されている場合もありますので、ご注意ください。

日本第四紀学会提案セッション

3 月 9 日現在での暫定的なプログラムです。発表者は筆頭から 3 名までだけが記されています。確定したプログラムは 3 月 19 日頃に発表者に通知され、4 月 6 日以降大会ウェブサイトを確認できます。

セッション Q145 『第四紀』オーラルセッション

5 月 21 日(木) 9:00 - 12:15 幕張メッセ国際会議場 ファンクションルーム A

座長 三浦英樹

9:00 - 9:15 田村糸子・山崎晴雄

- 房総半島に分布する浪花層・勝浦層の鮮新世テフラ対比に基づく上総層群下部の堆積年代
- 9:15 - 9:30 植木岳雪・鈴木毅彦・下司信夫
東北日本南部、白河火砕流堆積物の古地磁気層序
- 9:30 - 9:45 萬年一剛・笠間友博・町田 洋
箱根火山活動期における外来角閃石型テフラ（予報）
- 9:45 - 10:00 石村大輔
関ヶ原周辺地域の段丘面の編年と地形発達
- 10:00 - 10:15 青木かおり
火山ガラスの化学組成に基づくテフラ層の対比のための統計的手法の適用とその問題点
- 10:15 - 10:30 杉崎彩子・塚本すみ子・野木義史
OSL 年代測定のおホーツク海海底堆積物への適応
- [休憩]
- 座長 植木岳雪
- 10:45 - 11:00 中里裕臣・奥山武彦
地震前後の測地データに基づく荒砥沢ダム上流地すべり周辺の地盤変動
- 11:00 - 11:15 七山 太
A mega-trench survey of huge tsunami traces in Nemuro lowland, eastern Hokkaido
- 11:15 - 11:30 白井正明・若林 徹・大村亜希子
遠州トラフの表層コア試料から見いだされた安政東海地震起源と推定される地震性タービダイト
- 11:30 - 11:45 兵頭政幸・上嶋優子・松浦秀治
Application of a new geomagnetochronology using polarity transition features to hominid-bearing beds in Sangiran, Java, Indonesia
- 11:45 - 12:00 遠藤邦彦・原口 強・千葉 崇
中央アジアの湖沼堆積物から見る環境変動—地中海からの水分供給と NAO の関連で—
- 12:00 - 12:15 原口 強・宮田幸四郎・吉永佑一
カザフスタン、バルハシ湖の音波探査

セッション Q145 『第四紀』ポスターセッション

5月20日（水）幕張メッセ国際会議場ポスター会場 コアタイム 17:15-18:45

- 1 Rashid Towhida・Monsur Md.Hussain・鈴木茂之
バングラデシュにおける完新世の海水準変動
- 2 Bhuiyan Mohammad A.H.・隈元 崇・Rahman Md.Julleh Jalalur
砂質網状河川であるバングラデシュ、ジョムナ河の堆積相と堆積環境
- 3 中村有吾・西村裕一・中川光弘
国後島南部および色丹島における北海道起源の完新世広域テフラの同定
- 4 佐藤智之・檀原 徹・原口 強
Sedimentation rate and relative lake-level change during last 300ky in Lake Biwa, Japan.
- 5 宮地良典・中西利典・田辺 晋
新潟平野西部、角田・弥彦断層近傍において掘削したボーリングコアの密度解析
- 6 丸島直史・石山達也
最終間氷期以降の渋海川における下刻速度・隆起速度と河川形態の変化
- 7 松崎達二・豊蔵 勇・須藤 宏
東京都区内（山の手台地付近）の段丘堆積物詳細分布域の検討—地盤データベースの活用—
- 8 田力正好・安江健一・杉山真二
植物珪酸体分析に基づく段丘地形の形成環境の復元：利根川支流、鏑川流域の例
- 9 池原 研・井上卓彦

- 能登半島西方及び北方沖の陸棚堆積物一分布、年代、堆積速度一
- 10 村 亨・小玉芳敬・齋藤 有
鳥取海岸砂丘の地中レーダ断面
- 11 近藤玲介・塚本すみ子・植木岳雪
OSL年代測定法を用いた北海道北部、利尻火山北部における古期火山麓扇状地の発達過程
- 12 浮穴 愛
十勝平野・長流枝内丘陵に分布する前期一中期更新世テフラ
- 13 大場 司・林信太郎
宮城県小野松沢層の年代一第四紀カルデラ内堆積物
- 14 北田奈緒子・竹村恵二・井上直人
関西国際空港直下における大阪湾内の堆積層序の特徴
- 15 弦巻賢介・長井雅史・杉原重夫
塩原カルデラより噴出した大規模火砕流堆積物群の層序と年代
- 16 岩崎英二郎・須貝俊彦・水野清秀
濃尾平野熱田層上部に見出された軽石層の解析
- 17 宮入陽介・近藤玲介・松崎浩之
比重分画法を用いた古土壌試料のテフラ C-14 年代の高精度測定一北海道東部のテフラ層序の例一
- 18 藤原 治・入月俊明・三瓶良和
堆積相と化石の情報から認定された津波堆積物：駿河湾北岸の下部完新統の例
- 19 奥野淳一・三浦英樹
Quaternary melting history of Antarctic ice sheet derived from glacial isostatic adjustment modelling.
- 20 三浦英樹・岩崎正吾・奥野淳一
地形地質学的証拠から見た完新世中期の東南極氷床変動と氷床底環境

セッション Q146 『沖積層研究の新展開』 オーラルセッション

5月21日(木) 13:45 - 17:00 幕張メッセ国際会議場 ファンクションルーム B

座長 石原与四郎

13:45-13:47 趣旨説明

13:47-14:00 岡 孝雄

室蘭市街および北見幌別川下流域の沖積層（北海道沿岸域の沖積層の断面解析シリーズの一環）

14:00-14:15 大津 直・川上源太郎・廣瀬 亘

北海道石狩低地の浅層地下地質構造の予察的検討

14:15-14:30 谷川晃一朗・兵頭政幸・佐藤裕司

兵庫県豊岡盆地における完新世の相対的海水準変動と堆積環境

14:30-14:45 重野聖之・石井正之・七山 太

Lunch Box 法を応用した新しい大型定方位地層採取装置、ACE ライナーの開発

14:45-15:00 石原武志・須貝俊彦・八戸昭一

荒川低地中・上流域および妻沼低地における沖積層層序と地層形成

15:00-15:15 卜部厚志・本田孝子・木村克己

東京低地の沖積層における堆積物の供給と堆積作用

[休憩]

座長 卜部厚志

15:30-15:45 木村克己・小松原純子・石原与四郎

東京低地周辺の沖積層の堆積環境と土質特性との対比

15:45-16:00 竹村貴人・小田匡寛・木村克己

沖積層の軟弱粘土の堆積環境から見た動土質力学特性

16:00-16:15 石原与四郎・福岡詩織・江藤稚佳子

沖積層ボーリングデータベースを用いた地質モデル構築の問題点

- 16:15-16:30 小荒井 衛
地形分類データとボーリングデータを組み合わせた GIS 解析による災害脆弱性の評価
- 16:30-17:00 総合討論

セッション Q146 『沖積層研究の新展開』 ポスターセッション
5月20日(水) 幕張メッセ国際会議場ポスター会場 コアタイム 未定

- 1 川上源太郎・小松原純子・仁科健二
北海道当別町川下地区で掘削された沖積層ボーリングコア (GS-HTB) の解析
- 2 田辺 晋・石原与四郎、中島 礼
東京低地北部における沖積層のシーケンス層序と古地理
- 3 小松原純子・木村克己
沖積層ボーリングコア GS-SSS-1 (埼玉県さいたま市) の概要と荒川低地の堆積環境変遷
- 4 江藤雅佳子・稲崎富士
S波速度検層データと地盤特性に基づく AVS30 の推定
- 5 長澤重信・堀 和明
天竜川河口域にみられるファンデルタ堆積物

◆日本第四紀学会 2009年大会案内 (第2報) 発表申し込み

<大会の概要>

1. 日時・開催場所：2009年8月28日(金)～8月30日(日)
滋賀県立琵琶湖博物館 (滋賀県草津市下物町 1091)
<http://www.lbm.go.jp/index.html>
2. 日程
 - 8月28日 一般研究発表 (口頭及びポスター)・評議員会
 - 8月29日 一般研究発表 (口頭及びポスター)・総会・懇親会
 - 8月30日 午前：シンポジウム、午後：普及講演会
 - 8月31日 巡検
3. 発表の申し込み締め切り：2009年6月11日(木)
4. シンポジウム
「古環境変動に貢献する湖沼堆積物研究の役割」
世話人：里口保文、高橋啓一、竹村恵二、高原 光、井内美郎。全て依頼講演になります。
詳細については次号で案内。
5. 巡検の概要
8月31日巡検「琵琶湖西岸地域の地形・地質そしてその影響 (仮)」
詳細と申し込みは次号で案内。
6. 普及講演会 (一般市民を対象)
「琵琶湖堆積物がつむぐ過去から未来へのメッセージ」講演者：竹村恵二 (京都大)、高原 光 (京都府大)。シンポジウムと関連した内容です。詳細は次号で案内。
7. 大会実行委員会
実行委員会委員長 高橋啓一
連絡先：実行委員会事務局長 里口保文
〒525-0001 滋賀県草津市下物 1091
琵琶湖博物館
E-mail: [satoguti\(at\)lbm.go.jp](mailto:satoguti(at)lbm.go.jp) Tel: 077-568-4828 Fax: 077-568-4850

<発表の申し込み>

注意! 発表の申し込み方法が昨年度より一部変更になっています。ご注意ください。

1. 一般研究発表の申し込み

一般研究発表は口頭発表とポスターセッション（詳細は、要旨集原稿の送付先の後にあります）が行われます。登壇者（筆頭者）としては1人1件のみの発表が可能です。

一般研究発表希望者は、日本第四紀学会ホームページ (<http://wwwsoc.nii.ac.jp/qr/>) より、「2009年第四紀学会発表申込書」（MS-Excel ファイル形式）をダウンロードし、氏名・所属、講演題目、代表者の連絡先、発表種別・形式、使用機器の種別、その他特記事項（ある場合）など必要事項を入力し、ファイル名を代表者の漢字氏名に変更した上で、添付ファイルとして [suzukit\(at\)tmu.ac.jp](mailto:suzukit(at)tmu.ac.jp) 宛に、6月11日（木）までに、送信下さい。送信いただければ、昨年まで要旨集原稿送付時に必須であった紙媒体の「発表申込用紙」は提出不要になります。また、本発表申し込み末尾の「4. 講演要旨執筆上の注意」を熟読の上、その内容を理解し、遵守するようお願いいたします。このことについての同意の意思表示は、申込書該当欄に氏名を入力することで成立するとします。なお、電子メールが使用できない場合、8ページにある「発表申込用紙」（コピーでもよい）に所定の事項を記入の上、講演要旨と共にお送り下さい。

講演要旨は、「3. 講演要旨の原稿の書き方」にしたがった写真製版可能な原稿及びそのコピー1部と共に6月11日（木）までに行事担当幹事まで送付下さい（必着厳守）。講演要旨原稿は2ページ分執筆してください。原稿の行事担当幹事への到着をもって原稿の受付とします。

要旨集原稿の送付先：

〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1

首都大学東京都市環境学部地理環境コース

日本第四紀学会行事担当幹事 鈴木毅彦 あて

Tel : 042-677-2590 (直通) FAX : 042-677-2589 E-mail : [suzukit\(at\)tmu.ac.jp](mailto:suzukit(at)tmu.ac.jp)

(原稿送付は郵便でお願いします。メール添付は受け付けていません。また送付先は実行委員会ではありませんお間違えのないようにご注意ください)。

口頭発表（オーラルセッション）およびポスターセッションでの発表

時間は1件15分程度（質疑応答時間を含める）を予定しています（発表件数によって変更の可能性あり）。十分な説明や討論を希望する方にはポスターセッションへの申込をお勧めします。またポスター発表者には口頭ショートサマリー発表（1件あたり2～3分程度）をお願いするほか、ポスターの前で説明するコアタイムを設ける予定です。

2. シンポジウムの原稿提出

今回は依頼講演者のみが対象となります。シンポジウム発表で発表される方は、「3. 講演要旨の原稿の書き方」にしたがった写真製版可能な原稿およびそのコピー1部を6月11日（木）までに上記の行事担当幹事までお送り下さい（必着厳守）。原稿枚数は2ページまたは4ページでお願いします。また、日本第四紀学会ホームページ (<http://wwwsoc.nii.ac.jp/qr/>) より、「2009年第四紀学会発表申込書」（MS-Excel ファイル形式）をダウンロードし、氏名・所属、講演題目、代表者の連絡先、発表種別・形式、使用機器の種別、その他特記事項（ある場合）など必要事項を入力し、ファイル名を代表者の漢字氏名に変更した上で、添付ファイルとして [suzukit\(at\)tmu.ac.jp](mailto:suzukit(at)tmu.ac.jp) 宛に、6月11日（木）までに、送信下さい。送信いただければ、昨年まで要旨集原稿送付時に必須であった紙媒体の「発表申込用紙」は提出不要になります。また、本発表申し込み末尾の「4. 講演要旨執筆上の注意」を熟読の上、その内容を理解し、遵守するようお願いいたします。このことについての同意の意思表示は、申込書該当欄に氏名を入力することで成立するとします。なお、電子メールが使用できない場合、8ページにある「発表申込用紙」（コピーでもよい）に所定の事項を記入の上、講演要旨と共にお送り下さい。

3. 講演要旨の原稿の書き方

原稿用紙は、発表者各自が用意した A4 版白紙を、横書き・縦置きで使用してください。左右各 2.5cm、上端 3.0cm、下端 3.5cm は空白にしてください。表題・著者名は、(例)のように和文表題・著者名(所属)、英文著者名・表題の順に書いてください。和文表題は、1 行目の左側を 1.5cm あけて(左端から 4.0cm)左詰めで書いてください。2 行以上にわたる場合でも 1.5cm あけて左詰めで続けてください。和文著者名は、和文表題の後改行して、発表者を右端に右詰めで書いてください。2 行以上にわたる場合でも 1.5cm あけて右詰めにしてください。所属は和文著者名の後にカッコを入れて簡潔に書いてください。英文著者名・表題は和文著者名の後改行して、左詰め著者名・表題の順に「;」でつないで書いてください(所属は不要)。本文は英文表題の次の 1 行をあけて書き始めてください。行数・字数は自由ですが、36 行・35 字程度を目安としてください。不明な場合は昨年の要旨集を参考にしてください。本年も同一仕様です。ワープロ使用の場合は濃く印字してください。手書きの場合は黒色インクまたは黒色ボールペンを使用し、濃く細く書いてください。手書き図表の場合には黒インクを使用し原稿用紙に直接書くか、あるいは青色方眼紙・白紙・トレーシングペーパーなどに清書して枠内に貼ってください。図が原稿の上下端、左右端の空白部分にかからないようにご注意ください。印刷時に A4 の原稿が B5 版に縮小されますので、図の縮尺については「何分の 1」という表現はしないで必ずスケールを入れてください。

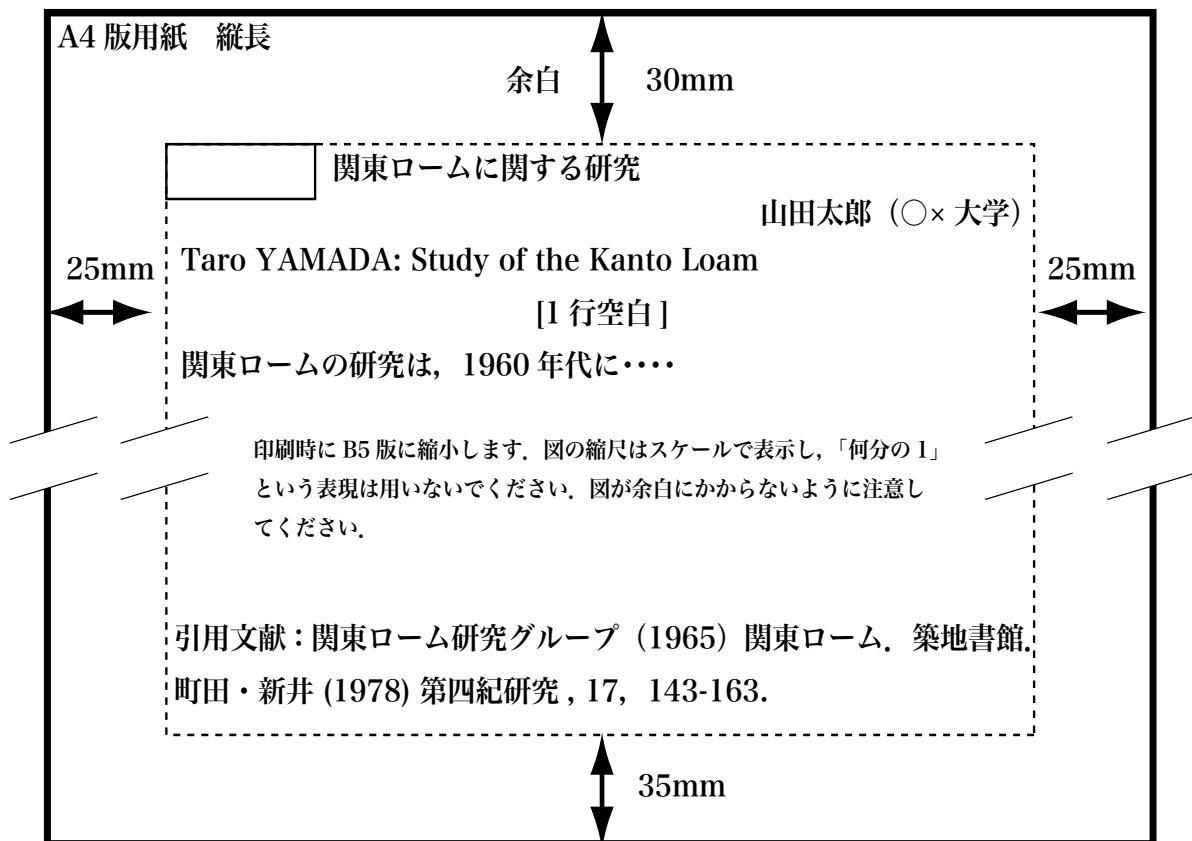
4. 講演要旨執筆上の注意

日本第四紀学会出版物等利用規定(2006 年 8 月 4 日決定)が講演要旨に適用されるかについては、2009 年 3 月現在、知的財産権等検討委員会の答申を受けて幹事会等で検討中です。

従いまして講演要旨の著作権につきましては、厳密な規定がありません。そこで、現段階では基本的には発表者の方に著作財産権があるものと判断します。一方、昨今の知的財産権をめぐる情勢から見て、送付いただいた講演要旨に図の転載許可が得られていないものや、文献の引用が不十分なものがあると、問題が生じる可能性があります。従いまして以下の点についてご注意の上で執筆下さるようお願いいたします。なお、以下の点について問題があると判断された講演要旨原稿については、原稿受付後であっても再提出を求める場合があります。

- 1) 既存の出版公表物などに対する知的財産権へのいかなる侵害も含まぬこと。
- 2) 他から転載されている全ての図表について、転載許可を得ていること。
- 3) 他の論文等の引用がある場合には、当該文献を全て明記する。引用形式としては、「竹内ほか(2005)第四紀研究,44,371-381.」などのように、引用箇所が判別できる限りにおいて簡略化して構わない。
- 4) 日本第四紀学会の名誉を傷つけ、第四紀研究の信用を毀損する盗用データ、捏造データ、その他学会の倫理憲章に反するものを含まないこと。
- 5) 講演要旨についての問い合わせ、苦情、紛争などが発生した場合、発表者はすべての責任を負うこと。

講演要旨の書き方の例



発表申込書

(電子メールで下記の内容を送信すれば本申込書は郵送不要)

氏名・所属				
講演題目				
代表者の連絡先	〒			
	e-mail:	TEL:	FAX:	
発表種別 (○をつける)	一般研究発表			シンポジウム
	口頭発表	ポスター	どちらでもよい	
液晶プロジェクター・OHPの使用 (○をつける)	液晶プロジェクター	液晶プロジェクター+OHP	OHP	その他
「講演要旨執筆上の注意」を理解し、その内容を遵守するならば、右にサインして下さい。				
				サイン _____

◆ 2008 年度 日本第四紀学会学会賞・学術賞受賞者記念講演会報告

2009年2月7日、表記の講演会が首都大学東京（南大沢）で開催された。すでに第四紀通信（15巻5号）等で報じられているように、本学会では第四紀学および本学会の発展に貢献し、優れた業績をあげた会員に「学会賞」・「学術賞」を授与することとし、2008年大会において初回の受賞者を決定した。各受賞者の業績は「第四紀研究」誌上等でうかがい知ることができるが、研究の歩みや研究の到達点、あるいは今後の展望などを気楽に語っていただき、会員に広く知ってもらえれば、また有意義な時間となるはずである。

今回は、大場忠道会員（学会賞受賞・北海道大学名誉教授）と五十嵐八枝子会員（学術賞受賞・北方圏古環境研究室）の講演が設定された。午前10時より町田会長によるお二人の紹介があり、続けて大場会員の「海底コア中の有孔虫化石の酸素・炭素同位体比を駆使した第四紀古海洋環境に関する一連の研究」が発表された。東北大学地質学古生物学教室からスタートし、南カルフォルニア大学や金沢大学を経て、北海道大学で退職されるまでの40年を振り返りつつ、日本海をはじめ多数の海域から得られた研究成果が詳しく紹介された。研究現場の情熱が伝わってくるスライド写真多数も披露され、聞き手の目を奪った。また五十嵐会員からは「化石花粉から見た北海道とサハリンの最終氷期と後氷期における環境変遷」が講じられた。最終氷期の北海道とサハリンを主な対象とし、植生と気候の変遷史を詳細に復元してきた五十嵐会員は時に泥濘と、時に寒さと格闘する厳しいフィールドワークをこなしてきた。そして、それらの先に定量的で精緻がゆえ説得力のある古植生復元の仕事があったことが改めて理解できたのだった。花粉ダイアグラムのスライドの合間に挟まれた極東の森や林の写真もまた貴重な資料だった。

質疑込みの講演時間は各40分と、これまでの仕事を語っていただくには全く足りなかったことは誰の目にも明らかだが、会場を埋めた50名の聴衆には両会員の辿った道筋や業績の大きさが伝わったことであろう。なお、同様の講演会は本年6月にも予定されており（本号10ページ参照）、松島義章（学会賞受賞者）・横山祐典（学術賞受賞者）両会員の発表が行われる。

（広報担当幹事 荻谷愛彦）



大場忠道会員



五十嵐八枝子会員

◆ 2008 年度学会賞・学術賞受賞者講演会及びシンポジウムのお知らせ (第 1 報)

下記のような内容で、2008 年度日本第四紀学会賞・学術賞受賞者の記念講演会及び「地球温暖化問題を考える研究委員会」主催のシンポジウムを開催する予定です。講演内容やシンポジウムプログラムなど詳細につきましては第四紀通信次号(16 巻 3 号、2009 年 6 月)及び第四紀学会ホームページなどで逐次お伝えします。

2008 年度日本第四紀学会賞・学術賞受賞者講演会 (第 2 回)

日 時：2009 年 6 月 27 日 (土) 13:00～17:30
場 所：日本大学文理学部 100 周年記念国際会議場
東京都世田谷区桜上水 3-25-40 (京王線下高井戸駅下車 徒歩 10 分)

プログラム (予定)

13:00～14:30 学会賞・学術賞受賞者講演会
松島義章氏 (学会賞受賞者)
横山祐典氏 (学術賞受賞者)

14:30～17:30 シンポジウム

*なお、当日、講演会の前に評議員会を開く予定です。

日本第四紀学会 シンポジウム [地球温暖化と環境防災]

日 時：6 月 27 日 (土) 14:30～17:30
場 所：日本大学文理学部 100 周年記念国際会議場

プログラム

・開会の辞及び趣旨説明 陶野郁雄 (「地球温暖化問題」を検討する研究委員会研究代表者)

前半 地球温暖化による海と海岸環境の脆弱化

基調講演 斎藤文紀 (産業技術総合研究所)

：「アジアのメガデルタ：海面上昇に支配されたデルタの成立と近年の環境変化」

コメント

村上正吾 (国立環境研究所)：「気候変動による東アジアの流域圏水環境の変化」

藤田士郎 (国土交通省 河川局)：「地球温暖化に伴い増大する水災害リスク」

中村裕昭 (地域環境研究所)：「地盤沈下と高潮水害の脅威—国内外の事例から—」

後半 地球温暖化による気象気候の変化

基調講演 山川修治 (日本大学)

：「地球温暖化渦中における異常気象と天候異変：2007 年北極海海氷の記録的縮小を中心に」

コメント

吉田 隆 (気象庁)：「地球温暖化と日本の気候」

加藤央之 (日本大学)：「地球温暖化と気象要素の極値発現」

・総合討論 座長 陶野郁雄

・閉会の辞 遠藤邦彦 (日本第四紀学会副会長)

◆日本第四紀学会講習会「大型植物化石（種実化石）の基礎知識と研究法」 参加報告

紀藤典夫（北海道教育大学函館校）

去る2009年1月24日・25日に、千葉大学園芸学部の百原 新さんを講師に、標記の講習会が開催されました。野外観察と実験室における化石の検出方法を学び、化石の採集から検出までの一連の過程を体験しました。

第1日目は、西武池袋線仏子駅（埼玉県入間市）に午後1時に集合。私は、その日の朝、函館から現地に向かいましたが、飛行機の出発の遅れにもかかわらず、集合時間に充分間に合いました。当日は、曇り空で雪がちらついており、現地ではやや寒い天気であったようですが、北海道から参加した私には穏やかな気候条件でした。参加者は19名。学生や大学院生、研究者、考古学関係の方が参加していたようです。百原さんの説明と簡単な自己紹介ののち、徒歩で10分程度の入間川の露頭に着きました。

観察した地層は、下部更新統の仏子層の比較的下部に位置する層準です。露頭は、弱く固結したシルト岩の間に亜炭層が挟まり、そのシルト岩中には植物片が散在した状態で含まれていました。亜炭層には、木材化石もかなり含まれていました。露頭からは、エゴノキの種子やキクロカリアの種子などがそれほど苦労なく見つかりました。その後、入間川を川沿いにさかのぼり、徐々に地層の下位を見ながらつぎの露頭へ進みました。途中、アケボノゾウの足跡化石を観察し、植物片を多く含んだ灰色のシルト岩の露頭で、再度、化石採集を開始しました。ここでは、メタセコイアの球果やイヌカラマツの枝のほか、緑色に輝く昆虫の鞘翅も見つかりました。いずれの露頭においても、一定の大きさの岩塊を採取して翌日の観察に備えました。

第2日目は、午前10時から千葉大学園芸学部(松戸)で実施されました。まず午前中は、百原さんから植物化石となる器官の種類やそ

のタフオノミー、種子の基本構造などについて、解説していただきました。また、北海道の湿原堆積物の研究例なども紹介していただきました。午後には、水洗・篩い分けによって、植物化石を集め、実体顕微鏡下で拾い出す方法を実際に行いました。当日は、すでに水洗・篩分された千葉県内の遺跡（完新世）の試料も用意されていたので、この試料からも種子化石などを拾い出す作業を行いました。

野外調査においても、2日目の実験室での講習においても良くまとめられた資料が用意されていました。特に、2日目に配付された資料は、化石の処理法・保管法などに百原さんの長年の経験がにじみ出ており、大変参考になるものでした。私は、花粉分析を中心に研究していますが、調査の際に大型化石が見つかることもあり、専門家はどのような方法で研究を行っているのを知りたかったのが参加の動機です。最近では、植物化石を研究する人が少なくなっていますが、このような機会が適宜もうけられ、植物化石研究に関わる人が一人でも増えてくれればと願っています。



露頭の前で百原講師の説明を聞く参加者

◆シンポジウム『東アジアへの新人の拡散と OIS3 の日本列島』開催報告

工藤雄一郎（名古屋大学年代測定総合研究センター）

日本第四紀学会研究委員会「東アジアにおける酸素同位体ステージ3の環境変動と考古学」（研究代表者：小野 昭）によるシンポジウムが、2009年2月7日に首都大学東京で

開催された。本研究委員会による研究発表は2008年6月に日本旧石器学会と共催で開催したシンポジウム「日本列島の旧石器時代遺跡：その分布・年代・環境」に続き、第2回

目となる。2008年6月のシンポジウムでは、年代、古植生、動物についての報告が行われ、今回のシンポジウムでは人類、考古、地形についての報告が行われた。参加者は120名を超える盛会となった。

本研究委員会は、東アジアへの新人（ホモ・サピエンス）の拡散のプロセスを検討し、またそれが日本列島への人類の最初の居住問題とどのようにリンクするのかについて、40-30kaの日本列島に残された考古学的な証拠（石器の製作技法、遺構、集落、新しい資源の開発など）から具体相を解明するとともに、その成果を新人の世界拡散の流れの中に位置づけていくことを主要な研究課題としている。

研究委員会の代表者である小野 昭氏がシンポジウムの趣旨説明を行った後、東アジアへの新人の拡散問題と、関連する考古学的な証拠および特徴的な事例、人類の活動の舞台である地形面の問題について発表があった。海部陽介氏が「後期更新世の東アジアにおけるホモ・サピエンスの拡散」、出穂雅実氏が「日本列島の“行動的現代人”の出現の証拠とその理解」、久保純子氏が「日本列島各地のステージ3の地形面はどこにあるか」、島田和高氏が「黒曜石利用のパイオニア期と環状のムラの消滅」、堤 隆氏が「同位体ステージ3の環境を拓いた石斧」の題目で、それぞれ発表を行った。

海部氏は、マレーシアのNiah 洞窟や周口店のTianyaun 洞窟の人骨など、東アジアの最古のホモ・サピエンスの化石出土の事例が、4万年前前後であることを紹介した。港川人骨の問題にも触れ、港川人骨は形態的に独自性があり、安易に縄文人骨と結びつけることが危険であることを指摘した。また現状では、人類化石によって日本列島にいつホモ・サピエンスが到達したのかを明らかにできず、この点は考古学的証拠に頼らざるを得ないこと、到達のルートも複数のルートを考える必要があることを指摘した。

出穂氏は西アジア・ヨーロッパ・アフリカの中部旧石器時代と上部旧石器時代の研究で議論されている、考古学的証拠からまとめられた「現代人的行動能力の発現」との比較から、日本列島の後期旧石器時代初頭の遺跡の場合、「日本列島への植民」、「神津島産黒曜石の利用から推定できる舟の利用」、「遠隔地石材の利用を埋め込んだ季節的移動」、「石斧などの組み合わせ道具の使用」などの点が、OIS3の考古学的遺跡で観察される現代人的行動であると指摘した。また、日本列島以外では確認されない諸特徴として、「局部磨製石斧の存在」、「大型環状集落の出現」、「狩猟用陥穴の構築」を挙げている。これに関係し、島



ホモ・サピエンスの拡散について説明する海部陽介氏

田氏は霧ヶ峰・八ヶ岳一帯の黒曜石原産地遺跡群と野尻湖遺跡群との関係を分析し、黒曜石利用の始まりとその変容の過程を「黒曜石利用のパイオニア期」として、日本列島における現代人的行動を示す考古学的証拠の一つであることを指摘した。

堤氏は、OIS3の日本列島の人類活動の特徴づける遺物の一つである局部磨製石斧について、の使用痕分析からその機能を推定した。局部磨製石斧がライフサイクルの中で機能転換する石器であり、木材の伐採・加工としての石斧から、破損・修復による小形化に伴い、皮革加工などに用いる搔器的な機能を持った石器へと変化した可能性を指摘した。現代人的行動の一側面としての森林環境への適応・開発を指摘した。

一方、久保氏は、OIS3の地形面について、南関東の「立川面」のうち、Tc 1面がOIS3に対比され、Tc 2面・Tc 3面がOIS2に対比されることなど、日本列島の各地でOIS3の地形面としてどのようなものがあるのかを報告した。久保氏はOIS3が前後のステージと比較して期間が長く、変動の幅が大きい可能性を指摘し、久保氏の発表にコメントした町田洋氏からも、OIS3の地形面はOIS3のうちに形成されたり、離水した地形面であり、当時の人類の生活の場であったのかどうかの議論をするためには、OIS3のどこの時期を議論しているのかを明らかにするべきであるとの指摘もあった。

討論は、諏訪 順氏の司会で、①東アジアへの人類の拡散、②OIS3中頃の人類がいたところの日本列島の古環境はどのようなものであったのか、③日本列島の環境にどのように適応したのか、の3点が議論され、シンポジウムの発表者以外からも、様々な意見が述べられた。

OIS3の時間的枠組みについては、筆者も2008年6月のシンポジウムで発表している

が、今回のシンポジウムにおいても、共通理解が十分に進んだとはいえない状況であることが再確認された。日本列島において、「現代人的行動」の特徴を示す考古遺物が発見されるのは、現状では 38 ka cal BP よりも新しい。おおよそ 3 万年に及ぶ OIS3 の時間幅の中でみれば、OIS3 の後葉の段階である。OIS3 の前半の温暖期はすでに終了し、OIS2 の最寒冷期に向けて寒冷化している時期にあたる。OIS4、OIS2 との対比のなかで OIS3 を全体として議論しても、日本列島の人類活動との対比の上ではあまり意味がない。研究代表者の小野 昭氏は、階層論的に問題を立て、時間の同時性といってもいろんなレベルの同時性で観察し、情報を発信していくことの必要性を述べたが、今後は、OIS3 のどこに照準を絞り、どこを議論していくのかを明確化していくことが必要である。空間的な同時性の問題も同様である。このためには、考古、人類、地形、植物、動物のそれぞれで、どの階層での議論ができるデータがあり、どこを焦点としてい



総合討論の様子

るのかの相互理解を、より一層進めていくことが必要であろう。OIS3 の時間軸については、日本第四紀学会の「古気候変動研究委員会」、「テフラ・火山研究委員会」とも連携を図り、第四紀学会全体としてこの問題について議論が展開されていくことを期待したい。

◆国際ワークショップ『死海地溝の先史時代・歴史時代・近現代の地震活動』

太田陽子（台湾国立大学）・奥村晃史（広島大学）

2009年2月16日から23日まで、死海地溝の地震をテーマにフィールドワークショップが開催された。Rivca Amit（イスラエル地質調査所）と Alessandro Michetti（インスブリア大学、INQUA 古地震研究グループ）が組織し、Safed 科学委員会、イスラエル地質調査所、ユネスコ、INQUA の支援によって実現した。1月のガザ侵攻時には一時開催準備が停滞したが、休戦後再開され、イスラエル研究者の行き届いた準備の下、実り多い研究集会が滞りなく開催された。ただし主断層が通過するヨルダン領内の巡検は、イスラエル人案内者の安全を考慮して外国人向けに警備が行き届いた Petra 遺跡の日帰り巡検だけに限られた。このため、主断層の観察はガリラ湖北方の Vadum Iacob 意外になく、主に副次断層と地震動の影響を観察した。参加者は約 12ヶ国からの 40名余りであった。なかでも、イスラエルの大学と地質調査所の地球物理学・地質学・地形学・歴史学・考古学・工学分野の若手研究者が貴重な国際研究集会の機会に、極めて学際的に研究発表と現地での説明に熱心に取り組んでいたのが印象に残った。イスラエルの北端から南端までのトランスフォームプレート境界における地質構造、地形・地層の変形、地震随伴現象、考古地震学を観察して詳しい説明を受けて議論を

交えたことがこの研究集会の最大の成果といえる。狭いイスラエルが広く思える長距離移動、連日早朝から日没までの巡検、夕食後は



ガリラ湖北方、Vadum Iacob 遺跡南側の十字軍時代の城壁に見られる左横ずれ変位 (2.15 m)。

10時過ぎまで発表とポスター展示があり充実した8日間であった。

16日はガリレア湖南西方、Safed のホテルでシンポジウムが開かれ、死海地溝と活断層・古地震に関する発表が終日行われた。17日はレバノンに接する Hula Valley の地下構造と地溝西斜面の急崖における転石から推定した地震履歴の検討、Nimrod 城の地震被害が紹介された。この地域はレバノン領内の restraining bend の南端にあたるが、断層は伏在し、地球物理データの解釈とモデルの提示に終始した。18日は急斜面に築かれた Safed の地すべりと地震の関係、ガリレア湖北方 Vadum Iacob 城壁の地震変位、東方の Susita 遺跡の神殿倒潰状況を観察と周囲の地すべりを観察した。Vadum Iacob では青銅器時代から十字軍時代までの遺構に 2 m ~ 8 m の左横ずれ変位が認められ、考古学者による築城と破壊についての見てきたような解説と共に、主断層の活動をつぶさに見ることができた。19・20日は死海西岸で、Lisan formation および完新世湖成層の Seismite--Homogenite--Mixed layer から復元される古地震の検討を中心に、死海地溝断層の活動に伴う様々な副次的現象を観察した。これは S. Marco、A. Amotz を始めとするイスラエル研究者のユニークな業績である。21日はヨルダン領内、Aqaba 市街の小規模な正断層群と遺跡変状、Petra 遺跡の地震によると思われる倒潰の状況について検討を行った。22日は Eilat 北方の小断層群と関連する長波長の変形、急崖の崩壊と浸食の年代学を検討した後エルサレムに宿泊、翌23日、古気候資料で知られるエルサレム西方 Soreq Cave において、石筍・鍾乳石の転倒を指標とした古地震復元を学んだ後、総括のための集会を行って解散した。

このワークショップを通じて印象が強かったことは、石造建築物の倒潰・損壊を指標とした地震考古学の発展、湖成層、石筍、地すべり、転石などを対象とした多様な古地震復元の手法、特に Lisan formation などの見事な『層間褶曲』（古い言葉であるが、Seismite と呼ぶことには抵抗がある）である。また、乾燥地域特有の堆積物と土壌、それに対応した年代測定技術の応用についても学ぶことが多かった。反面、ヨルダン領内の主断層が見えていながらそこへは行けないし、イスラエル側には調査資料もないことは、政治のなせ



ガリレア湖東岸、Susita 遺跡の神殿列柱の転倒状況。一致した転倒方向を地震動に起因させる説もある。

る業とはいえ極めて欲求不満であった。また、トレンチ調査とその解釈については、まだまだ未熟な点が多いと感じた。

死海では最近十数年間に湖水準が 30 m 以上低下している。湖畔には水面低下に伴う旧汀線が見事に発達し、急速に下刻が進む河川に沿っては、浸食基準面の低下に伴う段丘群が形成され、ゴルジュには完新世デルタの大規模な露頭が出現している。その露頭は地震動による未固結堆積物研究の絶好な舞台を提供している。Lisan formation は、後期更新世の現在より 200 m 以上湖水準が高かった時期に堆積し、後氷期の水面低下によって下刻でバッドランド地形が形成され、随所に峡谷状の露頭がみられる。また、後氷期に形成された岩塩層が最近の湖水準低下による地下水の流入により地下で融解し、水面低下で露出した湖棚には無数のシンクホールが形成されている。地震随伴現象も重要であるが、乾燥地域の湖における水文環境変動のダイナミクスと地質・地形形成には目を瞠らされるものがある。今後の古地震・古環境分野をはじめとする第四紀研究全般での共同研究の進展の必要性を強く感じた。

◆第 21 期第 1 回日本学術会議地球惑星科学委員会 INQUA 分科会議事録 (案)

平成 21 年 1 月 26 日 (月) 15:30 ~ 17:40

日本学術会議 6-A1 会議室

出席者: 奥村晃史、田村俊和、渡邊眞紀子 (記録)

オブザーバ: INQUA 国内委員会 太田陽子、町田

洋、熊井久雄、小野 昭、斎藤文紀

INQUA 招致準備委員会 遠藤邦彦

欠席: 碓井照子、三上岳彦、鈴木毅彦

配布資料

1. 委員名簿
2. 21 期日本学術会議地球惑星科学・第四紀学関連会員・連携会員名簿
3. 日本学術会議地球惑星科学委員会国際対応分科会議事録 (案) (21 期・第 2 回)
4. 記録 SCJ 第 20 期 200904-20520100-012
5. International Symposium on Paleoanthropology in Commemoration of the 80th Anniversary of the Discovery of the First Skull of Peking Man and The First Conference on Quaternary Research of Asia
6. 2007 年 INQUA 招致事業の記録 (2002 年: 会場決定まで)

参考資料

1. From INQUA Executive Committee (Arizona, Feb. 8-10) Agenda
2. 第四紀定義問題審議の現状 (1/13 現在)
3. 国際第四紀連合 INQUA (追加配布)

議題

1. 委員長、副委員長、幹事の選出
委員長に奥村晃史、副委員長に田村俊和、幹事に渡邊眞紀子を選出した。
2. 21 期 INQUA 分科会委員の追加
資料 2 を参考に第四紀学関連分野の数名の連携会員に分科会への参加を打診することを検討した。
3. 国際対応分科会報告 資料 4
資料 3 および 4 にもとづいて、Union レベルの分科会への昇格等の分科会制度の変更、INQUA 分科会の位置付けについて奥村委員長より説明がなされ、今後日本の INQUA 対応、国際発信力を持った若手の研究者の育成など日本人の実力を高める方策について、危機感をもって検討していきたいという旨の発言が奥村委員長よりあった。これとの関連で意見交換を行った。
4. 今期の活動について
(1) アジア第四紀学会 2009 年 10 月 19 日 ~ 23 日北京への対応について
資料 5 (北京原人 80 周年国際シンポジウムとアジア国際第四紀学会, 北京大会 2009 First Circular) にもとづいて、小野委員、斎藤委員、熊井委員などから情報提供がなされた。日本の対応について以下の確認がなされた。
・ INQUA 分科会、INQUA 国内委員会としてアジア第四紀学会北京大会を盛り立てていく。
・ つくば大会の申し送り事項「アジア全体の第四紀を扱う、幅広くアジアからの参加を可能にする

大会とする」等の要望書を作成し、正式にコミッテーターに送る。文案は奥村委員長、斎藤委員が作成する。

・ INQUA 執行部からも意見書を出す方向で検討する。INQUA の活動の一部として認めてもらえるように奥村委員長が執行委員会で話をする。

・ できるだけ多くの日本人が参加することが望ましい。

2) アジア諸国の INQUA 加盟の促進

参考資料 1 (2 月 8 ~ 10 日 INQUA 執行部議事次第抜粋) にもとづいて、インドネシアの加盟が次回 INQUA 執行部で審議されるという報告が奥村委員長からなされた。ベトナム、バングラデシュ、タイなどアジア諸国の INQUA 加盟に関する進捗状況や各国の国内活動状況、加盟の可能性などについて情報交換が行われた。

3) 2015 年 INQUA 大会日本招致について

資料 6 にもとづいて、組織、運営、費用について意見交換を行った。

・ 日本第四紀学会と INQUA 分科会が合同で行うことは 2008 年 8 月の総会で承認されていることを確認。

・ 学会若手から WG メンバーを選ぶ必要がある。50 周年記念国際シンポジウム参加者、古海洋・古環境・気候モデリング等の分野の研究者、堆積学、地形学連合、日本地形学会、IAG 等関連学協会、各分野の若手研究者に幅広い支援を募る体制を作る。

・ 経費について夏の第四紀学会大会に向けて予算書を作成して第四紀学会からの支援を申請する。

・ 分科会としては国内委員会、大会日本招致準備委員会と合同で行う。

・ 今後のスケジュール:

日本第四紀学会評議員会 (2 月 7 日、遠藤オブザーバ) および日本地形学連合評議員会 (2 月 7 日、田村委員) へ INQUA 大会日本招致について報告する。文案は奥村委員長が作成する。3 月中旬幹事会を目標に WG の人選を行う (メールで審議)。4 月に分科会を開催し議論する。5 月連合大会 (幕張) で全体会合を開く。

5. その他

(1) 参考資料 2 にもとづいて、第四紀定義問題審議の現状について、奥村委員長より報告がなされた。

(2) 地球惑星科学連合学術大会セッションの申請と活用について渡邊委員より説明がなされた。

(3) 参考資料 3 にもとづいて、分科会の立ち上げについて事務局からスケジュール等について説明がなされた。

(4) INQUA ケアンズ大会の報告が第四紀研究 2 月号に掲載される旨斎藤委員より報告がなされた。

(5) 20 期分科会報告は公式には閉め切られているが 21 期への引き継ぎおよびヒアリング準備のために作成することが確認された。

6. 次回会合 4 月開催の予定

◆ 2008 年度第 2 回評議員会議事録

日時：2009 年 2 月 7 日（土）11：40～13：10

場所：首都大学東京・南大沢キャンパス 5 号館 1 階 142 演習室

議長：渡邊眞紀子

出席者：町田 洋（会長）、遠藤邦彦（副会長・評議員）、吾妻 崇、池田明彦、池原 研、犬塚則久、海津正倫、大石道夫、大場忠道、岡崎浩子、小野 昭、菊地隆男、久保純子、公文富士夫、小泉武栄、佐藤宏之、鈴木毅彦、高橋啓一、陶野郁男、長友恒人、中村俊夫、三浦英樹、水野清秀、御堂島 正、百原 新、山崎晴雄、米田 稔、渡邊眞紀子（以上評議員 27 名、委任状 14 通）、苅谷愛彦（幹事）、中野利洋（事務局）

鈴木行事幹事の司会で、町田会長挨拶に続き、渡邊眞紀子評議員が議長に選出され、定足数確認の後、以下の報告と審議が行われた。

I. 報告事項

1. 2008 年度事業中間報告

1-1 庶務（百原幹事）

(1) 会員動向（2008 年 12 月 31 日現在）正会員 1464 名（うち、学生会員 60 名、海外会員 13 名を含む）、名誉会員 11 名、賛助会員 12 社、総計 1487。（逝去会員）中川久夫（2008 年 8 月）、吉川虎雄（2008 年 8 月）、藤田和夫（2008 年 12 月）
 (2) 2008 年度第 1 回評議員会を 2008 年 8 月 22 日に東京大学において開催した。議長：辻 誠一郎。2008 年度総会を 2008 年 8 月 23 日に東京大学において開催した。議長：犬塚則久。これらの詳細は、議事録として第四紀通信 15 巻 5 号に掲載した。

(3) 2008 年度幹事会をおこなった。第 1 回（8 月 22 日）、第 2 回（9 月 15 日）、第 3 回（11 月 19 日）、第 4 回（12 月 21 日）、第 5 回（1 月 31 日）。議事録を第四紀通信に掲載した。

(4) 引用許可の受付、会員名簿整理、寄贈図書の手付けを行なった。

(5) 2009 年日本第四紀学会学会賞および学術賞選考に向けて、学会賞受賞者選考委員の選挙を行なった。町田会長から推薦された 10 名の候補者に対して、評議員による選挙を行なった結果、遠藤邦彦、小野 昭、小池裕子、齋藤文紀、中村俊夫の 5 名が候補者として選出された。また、会員に向け候補者の推薦を依頼中である。

(6) 2009 年日本第四紀学会論文賞および奨励賞選考に向けて、論文賞受賞者選考委員の選挙を行なった。町田会長から推薦された 11 名の候補者に対して、評議員による選挙を行なった結果、須貝俊彦、竹村恵二、辻 誠一郎、松下まり子、横山祐典の 5 名が候補者として選出された。また、会員に向け候補者の推薦を依頼中である。

(7) 2009-2010 年評議員・役員選挙の選挙管理委員として小松原純子、近藤玲介、佐々木由香、菅沼悠介、谷口 薫、宮地良典の 6 名が推薦され、

委嘱を行った。

(8) 日本学術振興会への科研費審査委員候補者情報提供にあたり、審査委員候補者データベース登録者のリストを作成し、それ以外の情報提供すべき会員の抽出を、評議員へ推薦を依頼した。

(9) 古気候変動研究委員会、テフラ・火山研究委員会主催のワークショップ「第四紀中・後期の年代的枠組みを理解するためのワークショップ」を 2008 年 12 月 25 日、信州大学理学部大会議室にて開催した。

(10) 日本第四紀学会シンポジウム「氷床変動とグローバルな気候変動」を 2008 年 10 月 3 日、東京大学工学部 2 号館 1 F 大講義室にて開催した。参加者約 70 名。

(11) 2008 年第 1 回日本第四紀学会賞・学術賞受賞者講演会を、2009 年 2 月 7 日午前に首都大学東京南大沢キャンパス 5 号館地下 1 階大会議室で開催した。

(12) 学会・シンポジウム・特別展・講演会等の共催、後援：第 52 回粘土科学討論会 2008 年 9 月 3 日～5 日＜共催＞、神奈川県立生命の星・地球博物館 特別展「箱根火山 いま証される噴火の歴史」2008 年 7 月 19 日～11 月 9 日＜後援＞、北淡活断層シンポジウム 2009、2009 年 1 月 10 日～11 日＜後援＞

1-2 編集（岡崎幹事）

(1) 第四紀研究第 47 巻 5 号（論説 4 編、短報 1 編、講座 1 編、57 ページ）、6 号（論説 3 編、短報 1 編、書評 1 編、57 ページ）、第 48 巻 1 号（論説 1 編、短報 1 編、INQUA 報告、58 ページ）

(2) 2008 年東京大会特集号は第 48 巻 3 号で刊行予定。11 編の投稿が予定されている。

(3) 1 月 29 日現在、受理済み論文は 4 編（うち 2008 年冬のシンポ特集が 3 編）で第 48 巻 2 号に掲載の予定である。また、手持原稿は 19 編（論説：16 編、短報：3 編）である。論文投稿数は、2008 年 21 編（特集号および書評を除く）で、昨年（28 編）よりも減少している。2005 年からの減少傾向が続いている。また、当年に取り下げ・掲載不可となった原稿は 3 編であり、昨年よりも少ない。一方で、投稿受付から受理までにかかった時間の最短は、4 か月半程度であった。今後は第四紀学会主催以外の特集も積極的に受け付けていく。

(4) 第 48 巻 1 号より新「執筆要項」で投稿受付・編集を行うこととした。編集状況や問題点は「編集委員会だより」を通じて、会員に知らせるように努めている。

(5) 創刊号から 2006 年までの第四紀研究誌を電子アーカイブ化する事業を 2008 年度の JST との共同事業として進めるように準備した。また、Cross Reference に関する覚え書き協定の準備を進めた。

1-3 行事（鈴木幹事）

(1) 日本第四紀学会 2008 年大会を東京大学本郷キャンパス理学部 1 号館小柴ホールにおいて

2008年8月22日(金)～8月24日(日)に開催した。8月22日～23日に一般研究発表を行い、口頭41件、ポスター26件、合計67件の研究発表が行われた。また、22日夕方に評議員会、23日に総会を行った。24日には、シンポジウム「第四紀後期の気候変動と地球システムの挙動—その原因とメカニズムの解明に向けて—」を開催し、9件の発表が行われた。今回は、緊急セッション「岩手・宮城内陸地震」が追加され、2件の発表がなされた。大会の参加者は、3日間を通して、281名(会員179名、非会員102名)であった。また、25日～26日にかけては「関東東部沿岸域の地質・地形・人間活動」と題する巡検が行われ、33名が参加した。また、2008年11月16日(日)、国立科学博物館日本館2階講堂において2008年日本第四紀学会普及講演会「極限のフィールドワーク—南極観測から分かる地球環境変動の過去と未来—」を開催し、約100名の参加者があった。

(2) 日本第四紀学会2009年大会の準備を行った。大会は、滋賀県立琵琶湖博物館において、一般研究発表・総会を2009年8月28日(金)と29日(土)に、シンポジウム・普及講演会を8月30日(日)に、野外巡検を8月31日(月)に、それぞれ開催予定で準備が進められている。実行委員会は、滋賀県立琵琶湖博物館のスタッフを中心とする会員である。

(3) 学会賞・学術賞受賞者による講演会を、2月7日と6月頃の2回に分けて行う準備を進めている。

1-4 広報(荻谷幹事)

(1) 「第四紀通信」15巻5号(2008年10月)と15巻6号(2008年12月)を刊行した。同16巻1号(2009年2月発送予定)の編集と印刷を行った。

(2) 「第四紀通信」(電子版)15巻5号、6号と16巻1号を、それぞれ発行前月の中旬に日本第四紀学会ホームページに掲載した。

(3) 日本第四紀学会ホームページを通じて広報活動を行った。主なものは、①各種イベント(学会主催の講習会や普及講演会、共催行事等)の案内、②研究委員会関連のワークショップの案内、③2008年日本第四紀学会賞・学術賞受賞者講演会の案内、④2009年大会の案内、⑤日本地球惑星科学連合2009年大会の案内、⑥だいよんきQ&A、⑦「第四紀研究」目次掲載、⑧人事公募掲載、である。

(4) 第四紀学会会員メーリングリストを通じて、シンポジウム、研究集会、公募等の広報活動を行った。2008年9月1日～2009年1月27日の投稿数は39件である。

(5) 第四紀学会評議員会メーリングリストの運用を2008年11月20日に開始した。

1-5 渉外(三浦幹事)

(1) 日本地球惑星科学連合：2008年8月18日に東京大学理学部で第2回法人化準備会が開催され、各ワーキンググループからの報告と今後の計画について報告、法人の定款案について審議した

[三浦英樹出席]。2008年9月12日に東京大学理学部で第3回法人化準備会が開催され、各ワーキンググループからの報告と今後の計画について報告、法人の定款案を最終審議した[三浦英樹出席]。2008年10月24日に東京大学理学部で第4回法人化準備会が開催され、各ワーキンググループからの報告と今後の計画について報告、法人の定款案について確定した[三浦英樹出席]。2008年11月13日に東京大学理学部で第9回拡大評議会が開催され、新規加盟学会、学術会議(第21期報告)、運営会議活動、連合法人化準備会の報告、一般社団法人地球惑星科学連合の設立が承認された[奥村晃史代理出席]。2008年11月21日に東京大学理学部で第5回法人化準備会が開催され、第9回拡大評議会で承認された法人化に向けて、設立時社員の名簿を確定し、承諾書、委任状へ捺印を行った[三浦英樹出席]。

(2) 一般社団法人日本地球惑星科学連合：日本地球惑星科学連合は12月1日、法務局への登記申請を済ませ、これまでの連合を解散、改めて一般社団法人日本地球惑星科学連合となった。これを受けて、2009年1月12日に東京大学理学部で第1回臨時社員総会および整備委員会が開催され、木村会長から社団設立からこれまでの経緯および今後の方針の報告、暫定セクションプレジデントの承認が行われ、各学協会を通して会員登録を積極的に進めていく方針が確認された[三浦英樹出席]。また本学会の同連合への加盟登録について、1月下旬に入会を申し込んだ。なお団体会員の会費は1万円/年である。

(3) 自然史学会連合：平成20年度の連合の講演会「自然史研究最前線—恐竜からDNAまで—」が2008年11月15日に千葉県立中央博物館で開催された[三浦英樹出席]。2007年12月13日に国立科学博物館で2008年度総会が開催された。講演会の開催、ロレックス・インスティテュートが行うロレックス賞(<http://www.rolexawards.jp>)への応募の呼びかけ、博物館部会、ホームページの維持管理についての報告に続いて、2007年度決算、2008年度会計経過報告、2009年度予算案と事業計画について審議承認された。

(4) 「地質の日」事業推進委員会：2008年7月25日に産総研臨海副都心センター別館で第2回地質の日事業推進委員会が開催された[三浦英樹出席]。前回議事録確認のあと、本年度の事業推進委員会のまとめ、「地質の日」webサイトの開設、本年の各地で行われた第1回「地質の日」事業のまとめと報告、第1回「地質の日」事業のまとめとして全国の地質ニュース「特集号「地質の日」元年」の発行計画の報告(2009年1月・2月号と2号に分けて掲載予定)、2009年にむけて行う事業とスケジュールの確認が行われた。また、10月20日締め切りで、地質の日のポスターとロゴの募集が行われ、12月にロゴが確定した。ポスターについては該当者無しとなった。

(5) 国際惑星地球年(IYPE)：日本のIYPE事務局から、IYPEを盛り上げるために、協賛する学会の関連するイベントを積極的に登録して欲しいとの

依頼があり、メーリングリストおよびホームページを通して、関連するイベントについて積極的に登録するように連絡した。

(6) ジオパーク委員会：今年度の日本および世界ジオパークについては、日本ジオパーク委員会に対して7件の認定申請があった。これらについて書類および口頭発表、さらに委員の現地調査を経て、12月8日の日本ジオパーク委員会において、次の3件が世界ジオパークの候補として推薦された。洞爺湖有珠山、糸魚川、島原半島。またそのほかの4件：アポイ岳、南アルプス（中央構造線）、山陰海岸、室戸も含めて、日本ジオパークとして認定された。2月20日に日本ジオパーク記念式典が行われ、同時に認定祝賀会が開催される予定である。

1-6 企画（佐藤幹事）

(1) 学会主催のシンポジウム「東アジアへの新人の拡散とOIS3の日本列島」を、2009年2月7日午後、首都大学東京5号館にて開催する予定である。世話人は、小野 昭・諏訪 順会員で、東アジアにおける現生人類の拡散、日本列島におけるその証拠と理解、OIS3の地形に関する会員5名の講演と総合討論が行われる。シンポジウムの内容については、『Quaternary International』に特集号として掲載する方向で準備を進める予定である。本年度は、6月頃に開催予定の評議員会に合わせて、第2回の学会主催シンポジウムを開催する計画で準備を進めている。

(2) 2008年2月に実施した学会主催のシンポジウム「考古遺跡から何がわかるか? : Geoarchaeology」の特集原稿2編を、『第四紀研究』48巻2号(2009年)に掲載する予定である。

(3) 2008年度第1回の講習会「縄文土器の製作技術と焼成に関する実験考古学」を、2008年10月25日と11月8日の2日間、東京都埋蔵文化財センター（東京都多摩市）を会場に、同センターとの共催で実施した。世話人は、竹尾 進氏（同センター）で、第1日目は、多摩ニュータウン遺跡群出土の縄文中期の土器を手本として、時代背景・製作技術等の説明を受けた後に、粘土採掘坑遺跡から採取された実際の粘土を使用して、縄文土器の復元製作を行った。復元した土器の乾燥期間を置いた第2日目は、予想されている焼成技法にできるだけ忠実に従った方法によって、土器の焼成を行った。参加者は4名である。

また本年度第2回の講習会「大型植物化石（種実化石）の基礎知識と研究法」を、2009年1月24～25日の2日間、埼玉県西部仏子の入間川沿い（1日目）と千葉大学園芸学部（2日目）を会場に実施した。世話人は、百原 新氏（千葉大学園芸学部）で、第1日目は仏子層（前期更新世）の露頭で大型植物化石の採取方法や露頭の調査法について説明し、第2日目は実験室でタフノミーや種実類の形態学、植物化石の水洗篩分法の説明を行った後、実体顕微鏡を用いて試料から種実類を取り出し観察を行った。参加者は1日目が19名、2日目が23名である。

2. 2008年度会計中間報告（吾妻幹事）

資料1（省略）に基づき、2008年12月31日現在での収支会計中間報告が行われ、予算がほぼ予定どおり執行されている旨説明があった。

3. その他

3-1 50周年記念事業実行委員会報告（吾妻幹事）

C D出版の進捗状況について、図の転載許可作業を進めているところである旨報告があった。

3-2 第21期日本学術会議 地球惑星分科会 INQUA 分科会報告（町田会長）

日本学術会議地球惑星科学委員会 INQUA 分科会 奥村晃史委員長から提供された資料2「第19回 INQUA 大会日本招致準備委員会の活動について」（省略）に基づき報告があった。

2008年10月の第21期日本学術会議発足を受けて、新規に INQUA 分科会設置を申請して承認された。分科会メンバーは第20期と同じで、奥村晃史を世話役として活動の準備を進め、2009年1月26日に第一回の分科会を INQUA 国内委員会・第19回 INQUA 大会日本招致委員会世話役と共に開催した。今期の当面の体制は以下のとおりである。INQUA 分科会（委員長：奥村晃史、副委員長：田村俊和、幹事：渡邊真紀子、委員：碓井照子、三上岳彦、鈴木毅彦）、INQUA 国内委員会（委員長：斎藤文紀、委員：大田陽子、町田 洋、熊井久雄、多田隆治、小野 昭、斎藤文紀、横山祐典）

第一回分科会では、21期 INQUA 分科会委員の選任、国際対応分科会報告、今期の活動について審議を行った。今後の活動として、アジア第四紀学会への取り組み、アジア諸国の INQUA 加盟の促進、および2015年 INQUA 大会招致について議論した。INQUA 大会招致については、日本第四紀学会・関連学協会・研究者に対して、組織と活動予定の概要を検討して、次のような文書で幅広い支援をお願いして招致活動に着手することとした。

II. 審議事項

1. 第四紀研究バックナンバーの電子アーカイブ化についての承認

資料3「創刊号より第45巻6号までの「第四紀研究」を電子アーカイブ化することに伴う著作権の一部譲渡に関する告知」（省略）に基づき、公文編集幹事より以下の説明があった。

「第四紀研究」誌の一層の発展と普及のために、JST が運営する J-Stage においてオンラインでの公開を検討し、2007年より本会誌はすでに公開されている。2006年以前の会誌についても同様のオンライン化することが望ましいという判断から、これまでも J S T の電子アーカイブ化事業になんとか申請していたが、2008年度事業として採択され、実施される運びとなった。その事業の実施に当たり、アーカイブ化する著作物の著作権を本会が保持していることが JST と契約する上での前提となっている。そのため、著作権規定が不十分であった2006年以前に本会誌に掲載された著作物の著作権の一部（複製権、公衆送信権、それ

らを第三者＝JSTに使用させる権利；アーカイブ化事業に必要な範囲に限定）を、本会へ譲渡して頂くことが必要となっている。

2008年度の事業であるため、JSTとの契約を遅くとも2009年4月までに行う必要がある、それ以前に上記のような著作権の一部が本会に帰属していることを明確にする必要があるため、資料3（省略）の「告知」をもって、著作権者からの承諾を得たい。告知期間が短くなってしまっているのは、事業スケジュールのタイミングについて判断が甘かったことに起因しており、深くお詫びする。評議員会の承認をお願いしたい。告知は「第四紀通信」に同封して会員に送付するほか、ホームページにも掲示し、会員外の著者にはリストを作成して連絡を行う予定である。

それに対し、第四紀学会における著作権の扱いや、譲渡手続きに関する今後の変更点について、「告知」にわかりやすい補足説明を加えるよう評議員から要請があった。補足説明を幹事会で検討し追加して「告知」を行うことでアーカイブ化を進めることが承認された。

2. 名誉会員候補者選考規定の改定について

2008年度第1回評議員会において学会賞・学術賞受賞候補者を正会員に限定するという学会賞規定等の改訂が認められたが、それに伴い名誉会員候補者選考規定の見直しが必要となったため、幹事会で検討を行い、資料4「日本第四紀学会 名誉会員候補者選考規定（改訂案）」を作成した旨の説明が水野幹事長より行われ、議論と承認を依頼した。一部の文言を修正の上、承認された（本報告末資料）

Ⅲ. その他

以下の2件の依頼が行われた。

1. 日本学術振興会への科研費審査員候補者情報の提供について

資料5（省略）に基づき百原庶務幹事より、日本学術振興会への科研費審査員候補者情報の提供を依頼した。

2. 学会賞・学術賞候補者、論文賞・奨励賞候補論文の評議員からの推薦について

水野幹事長より推薦を依頼した。

以上で審議を終え、議長解任の上閉会した。

日本第四紀学会 名誉会員候補者選考規定

(1975年11月17日、評議員会にて決定)
(2007年2月3日、評議員会にて一部改正)
(2009年2月7日、評議員会にて一部改正)

- 第1条 本規定は、日本第四紀学会会則第6条に基づき、第四紀学および日本第四紀学会について特に顕著な功績のある会員に与えられる名誉会員の候補者選考に係わる事項を定める。
- 第2条 名誉会員は、会長、学会賞・学術賞受賞者などとは異なり、個人のみならず日本第四紀学会にとっての名誉として位置づけ、その候補者を選考するものとする。
- 第3条 評議員会は、原則として2年ごとに名誉会員選出のために、名誉会員候補者選考委員会（以下選考委員会と省略する）を設けることができる。
- 第4条 選考委員会は、会長により委嘱される若干名の正会員で構成される。委員の任期は、委嘱された日から評議員会への答申を終える日までとする。
- 第5条 選考委員会は、次にあげる選考基準を満たす正会員の中から、多大の貢献があった者を名誉会員候補者として推薦することができる。日本第四紀学会に対し永年にわたり特に顕著な貢献のあった者、あるいは第四紀学に貢献した優れた学術業績をあげた者。たとえば会長経験者、評議員・INQUA執行役員・日本学術会議会員などを長期にわたって務めた者、日本第四紀学会賞・学術賞受賞者など。なお、そのほかの名誉会員候補者の条件として、(1) 年齢70歳以上、(2) 本会会員歴20年以上、(3) ~~本学会誌に発表された論文があること~~を満たしていることとする。
- 第6条 選考委員会は、評議員会から指定された日までに候補者選考を終了し、選考経過と結果を評議員会に答申する。選考委員会は、必要に応じて参考人から意見を聴取することができる。
- 第7条 評議員会は、選考委員会から推薦された候補者を元に、最終的な名誉会員候補者を決定し、総会にはかる。
- 第8条 本規定の変更には、評議員会の承認を必要とする。
- 第9条 本規定は2009年8月1日から施行する。

◆創刊号より第 45 巻 6 号までの「第四紀研究」を電子アーカイブ化することに伴う著作権の一部譲渡に関する告知（再）

（以下の告知は第四紀研究 48 巻 1 号とともに会員各位に送付しておりますが、ここに再掲いたします：幹事会）

日本第四紀学会（以下「本会」という）は、1961 年の創刊以来、学会誌「第四紀研究」（以下「本誌」という）を刊行して参りました。48 年の長きに渡り本誌を刊行できましたことは、ひとえに会員各位のご支援、ご協力の賜物と深く感謝申し上げます。

この度、本誌は独立行政法人科学技術振興機構（JST）の電子アーカイブ対象選定委員会によって、創刊号以降の全雑誌が電子化されアーカイブされる対象誌として選定されました。電子アーカイブ事業は、国内の学協会の学術雑誌の国際発信力を強化するとともに、日本の知的財産の保存を目的として行われ、JST が紙媒体の雑誌の電子化をおこない、同機構インターネットウェブサイト（http://www.journalarchive.jst.go.jp/japanese/top_ja.php）上で公開するものです。これにより、本誌が一層広く知られるようになり、第四紀研究の成果の社会還元増進と、第四紀学会の国内外の認知度の向上が期待されます。

本誌の電子アーカイブ化にあたっては、著作権法により、掲載された論文などの著者からその著作権の本会への譲渡が必要とされます。

本誌では、1977 年 15 巻 4 号よりは投稿規定において著作権を学会がもつことを明記しております。また、2007 年 1 月から投稿規定によって著作権等譲渡同意書の提出が義務づけられ、論文などの著作権（複製権、公衆送信権を含む）が本会に帰属することが定められております。しかしながら、投稿規定内に著作権規程を定める以前に掲載された論文などについては、著作権の譲渡が明確にされていない状態となっております。また、1977 年以降 2006 年までにつきましては電子媒体での公開（公衆送信権）など著作権の範囲について言及しておりません。

そこで、平成 21 年 2 月 7 日の評議員会における承認を経て、2006 年以前の本誌に掲載された著作物（下記参照）について、それらの著者に対して、著作権の一部（学術目的のために、著作物の一部または全部を複製し、公衆発信する権利、および、前記の権利を第三者に行使させる権利）を本会へ譲渡していただくことをお願いすることと致しました。本来、個別に譲渡の許諾をお願いすべきところですが、著者の数が膨大であり、また、連絡先が不明もしくは故人となられた著者も少なくないことから、この会告（「譲渡に関する告知」）により、譲渡をお願い申し上げる次第です。万一、この件に関しまして承諾していただけない場合、あるいはご不審の点がある場合は、2009 年 3 月 31 日までに本会事務局に文書または電子メールでお申し出下さい。承諾していただけなかった場合にはアーカイブの対象とは致しません。お申し出のなかった著作物につきましては、ご承認いただけただけのものとして電子アーカイブ化の作業を進めさせていただきます。なお、本会は、このお知らせが著者のみなさまの目に触れることを前提としておりますが、何らかの事情でこの件をお知りになる機会がなかった場合もありえますので、期限以降におきましても当事者からのお申し出があれば、当該著作物の公開は可及的すみやかに中止いたします。

対象となるのは創刊号より第 45 巻第 6 号（2006 年 12 月 1 日発行）までの第四紀研究誌に掲載された論説（原著論文）・短報・総説・討論・資料・口絵・解説・講座・国際会議報告（以上を著作物と称する）です。

最後になりましたが、このアーカイブ化事業が JST の 2008 年度事業であることから本年 3 月末までに対象著作物の著作権譲渡を受ける必要があるため、告知に十分な時間がとれていないことを深くお詫びいたします。事情をご理解いただき、よろしく御了解くださいますようお願い申し上げます。

2009 年 2 月 7 日
日本第四紀学会長 町田 洋

連絡先： 〒 162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町 519 番地 洛陽ビル 3 階
 日本第四紀学会 事務局 TEL 03-5291-6321 FAX 03-5291-2176
 e-mail daiyonki(at)shunkosha.com

補足説明：

この告知は学会ホームページでも掲載しております。また、そこには著作権に関わる説明も載せております。この告知で譲渡をお願いしている「公衆送信権」は、放送やインターネットを通じて著作物を配信する権利のことであります。

第四紀学会に帰属する著作権とその利用方法については、日本第四紀学会出版物等利用規定で説明されております。今回告知でお願いしたように著作権の一部を譲渡していただきましても、著者はご自分の著作物を大幅な裁量権をもって利用できます。

本会としてもこの告知の周知には努力しておりますが、特に、非会員の著者をご存じでしたらその方に、また、故人となられた著者をご存じの方はそのご遺族に本告知をお伝えすることに協力いただければ幸いです。

◆第四紀学会における著作権の扱いについて

著作権とは

日本の著作権法の下では、著作物の全ての権利は創作の時点で自動的に創作者（著作者）に発生する。著作物を複製したり、放送したりする権利は財産権の一種であるが、その他に著作者の人格的利益を保護するものとして、人格権の一種である著作者人格権がある。前者は財産権の一種で、譲渡可能であり、さらには分割して譲渡することも可能。後者は譲渡不可。

前者には、複製権（著作物を複製する権利）、上演権及び演奏権（著作物を公に上演したり演奏したりする権利）、上映権（著作物を公に上映する権利）、公衆送信権等（著作物を公衆送信したり、自動公衆送信の場合は送信可能化する権利。また、公衆送信されるその著作物を受信装置を用いて公に伝達する権利）、口述権（言語の著作物を公に口述する権利）、展示権（美術の著作物や未発行の写真の著作物を原作品により公に展示する権利）、頒布権（映画の著作物をその複製によって頒布する権利）、譲渡権（著作物を原作品か複製物の譲渡により、公衆に伝達する権利。ただし映画の著作物は除く）、貸与権（著作物をその複製物の貸与により公衆に提供する権利）、翻訳権（翻案権 著作物を翻訳し、編曲し、若しくは変形し、又は脚色し、映画化し、その他翻案する権利）、といった権利が含まれる。

なお、著作物の利用や使用について、その便宜上必要とされる範囲または著作権者の権利を害しない範囲において、著作権が制限されることがある。例えば、私的に利用に関わる複製や教育の場における利用は許されている。

第四紀研究誌における著作権

＜現在の著作権の帰属＞

2007年1月1日以降に掲載された著作物については、投稿規定によって、第四紀研究誌に掲載された著作物の著作権（複製権、公衆送信権を含む）は、第四紀学会に帰属するとされています。このことは著作権譲渡同意書を論文受理後に提出していただくことで保証されます。この著作権の範囲には著作人格権は含まれていません。なお、著者（作成者）がご自分の著作物を利用するにあたっては、日本第四紀学会出版物等利用規定（第5条）に記述されていますように、大幅な裁量が許可されています。作成者以外が第四紀学会に著作権が所属する著作物を利用する場合には、日本第四紀学会出版物等利用規定（第6、7条）に従い、転載許可申請書等の文書で申請し、許諾を受けなければならない。

＜1977年10月～2006年12月の著作権＞

1977年の第15巻4号から2006年の第45巻6号までは、投稿規定において著作権が学会に帰属することを明記しておりますが、電子媒体での公開（公衆送信権）など著作権

の範囲について言及していません。

<創刊号～第15巻3号の著作権>

創刊号より15巻3号までについては、著作権に関する規定が有りませんでしたので、著作権は著者に属しています。

<2009年4月1日以降の変更>

2009年2月7日付けの学会長名での告知によって著作権の一部譲渡が許諾されますと、2006年12月以前の「第四紀研究」誌に掲載されたすべての著作物についても、第四紀学会が学術目的に限って、複製と公衆送信の権利を排他的に使用し、また、その使用を第三者に許可することができるようになります。なお、不許可の連絡をいただいた著作物については、公衆送信を行わない（学会事務局に連絡のあった時点で可及的速やかに公開を中止する）こととなります。また、1977年の15巻3号以前につきましては複製権も行使しません。

◆日本第四紀学会第5回幹事会議事録

日時：1月31日（土）13：00-18：00

場所：日本大学文理学部8号館1階レクチャーホール

出席者：町田、遠藤、水野、公文、吾妻、鈴木、苅谷、中野（事務局）、百原（書記）

1. 報告事項

(1) 庶務 早稲田大学入試問題に使用された第四紀研究の論文の転載とホームページ公開について許諾した。選挙管理委員6名（小松原純子、近藤玲介、佐々木由香、菅沼悠介、谷口 薫、宮地良典）を決定し、委嘱をおこなうことを確認した。

学会賞受賞者選考委員および論文賞受賞者選考委員の選挙を行い、1月24日に千葉大学園芸学部で水野、三浦、百原の立ち会いのもとに開票を行った結果、学会賞受賞者選考委員として遠藤邦彦、小野 昭、小池裕子、齋藤文紀、中村俊夫の5名が候補者として選出された。また、論文賞受賞者選考委員として須貝俊彦、竹村恵二、辻 誠一郎、松下まり子、横山祐典の5名が候補者として選出された。各選考委員に承諾をとり、委嘱を行うこととした。

日本学術振興会審査員候補者データベースに含まれる名簿を作成し、確認した。評議員会MLと評議員会で推薦者の依頼をすることを確認した。学会への寄贈図書・雑誌類の管理・処分の方法について次回幹事会までに案を作成することとした。

(2) 会計 収支会計中間報告の確認作業を行った。次回大会での副賞代は次年度会計からの支出とすることを確認した。広報編集用パソコンの更新費は予備費で執行することとした。

(3) 編集 新執筆要項での編集開始を始めた。JSTのCross Referenceに参加することを確認した。会員数の減少と、今後の電子ジャーナル化に伴い、バックナンバーを第四紀研究については48巻2号から1700部（丸善委託分200部を含む）に変更することとした。

(4) 行事 2009年大会3日目にシンポジウムと普及講演会を行うので、学会賞受賞講演会は次回大

会とは別の機会に設定することとした。時期は幹事会で今後決める予定。次年度の大会会場についてジオパーク候補地を含め候補を検討した。

(5) 広報 第四紀通信16巻1号の編集を完了した。編集用パソコンの更新を行った。第四紀通信印刷部数は1500部とすることを確認した。ホームページの管理・更新及びメーリングリストの運用を行った。

(6) 渉外 社団法人になった地球惑星科学連合加盟について、引き続き加盟することとした。年会費1万円支払い、来年度以降は加盟学協会分担金として計上することとした。連絡委員として三浦幹事に依頼することを確認予定

日本ジオパークには7件の認定申請があり、3件（洞爺湖有珠山、糸魚川、島原半島）が世界ジオパーク候補として推薦された。アポイ岳、南アルプス（中央構造線）、山陰海岸、室戸を含めた7件が日本ジオパークに推薦された。

Island Arcの編集顧問の第四紀学会からの推薦枠について、候補者を評議員会で検討することとした。

(7) 企画 次回の講習会候補について意見交換を行った。

(8) その他

テフラ火山委員会でINTAV招致委員会を立ち上げ、2010年5月に招致することが決まり、INTAV-J（九州霧島で開催）のFirst Circularを立ち上げたことの報告があった。

19回INQUA大会日本招致準備委員会の活動について、報告事項として評議員会に提案することとした。準備委員会の立ち上げを3・4月に行う。招致活動にはINQUA対策費をあて、来年については企画書を出して予算をつけることとした。

Japan-PAGESについて地球惑星連合大会のユニオンセッションが行われること、メーリングリストが立ち上げられたことについて報告があった。

2. 審議事項

(1) 学会賞学術賞記念講演会とシンポジウムの準備について、講演要旨、講演者の謝金等の支出方法を確認した。当日の役割分担等を確認した。

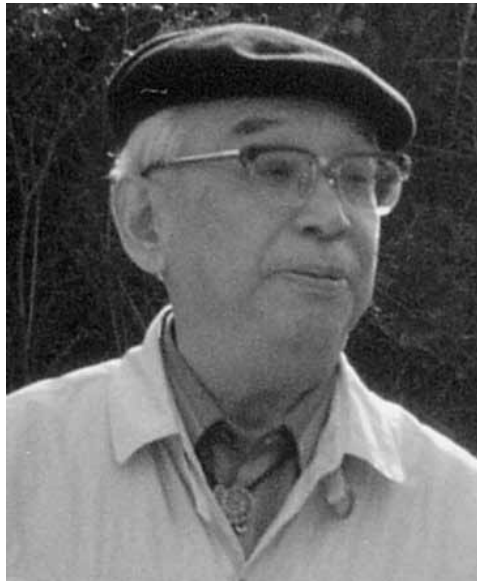
- (2) 第2回評議員会資料の作成：資料に基づき検討した。
- (3) 名誉会員選考規定改訂案の検討：評議員会に提案する改定案を検討した。
- (4) J-Stage アーカイブ化に伴う著作権の一部譲渡に関する告知について
評議員会とML、第四紀通信に添付する告知文文面の検討を行った。第四紀研究のアーカイブ化

はすでに議論されていること、契約上手続きを緊急に進める必要から、評議員会では承認事項とし、経緯を評議員会資料に掲載することとした。

(5) 公益法人化の検討について：法律改正に伴う公益法人化の是非について、検討を始めることとした。

(6) 5月または6月の評議員会・学会賞受賞者講演会の日程調整：早急に行うことを確認した

◆藤田和夫先生のご逝去を悼む



藤田和夫先生が、平成20年12月1日午後、ご家族の見守る中、神戸市六甲病院でご逝去されました。享年89歳でした。

先生は大正8年、大阪のお生まれで、昭和18年京都帝国大学理学部（地質学鉱物学専攻）を卒業、兵役の後、同大学助手を務められ、昭和25年に設立間もない大阪市立大学工学部の助教授として地学教室に赴任されました。

昭和35年理工学部分離後、理学部教授に昇進され、昭和58年に定年で退職されるまで、地質学の教育・研究に努め、同年、同大学名誉教授になられました。引き続き、帝塚山大学教養学部教授に就任され、平成2年に同大学を定年退職されるまで私学教育にも尽力されました。その後、昭和62年に断層研究資料センターを設立され、平成20年センターを解散されるまで、理事長として活断層の資料収集を通じて、研究継続と社会活動に従事されました。

先生は旧制高校から京都帝国大学学生時代に白頭山登頂、北部大興安嶺探検を果たされ、昭和30年には、京都大学カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊に参加、翌年の京都大学・パンジャップ大学合同ヒンズークシ探検を隊長として成功させておられます。

先生は、これらの学術探検で培われたグローバルな視点から、六甲山地をはじめとする近畿地方における地質学的・地形学的調査研究を緻密にかつ大胆に進め、第四紀構造地質学と活断層研究の分野での先駆的研究を行ってこられました。昭和37年には断層分布と広域の地形学的特徴をもとに「近畿トライアングル」を提唱されています。これは、それまでの地質学と地形学を融合した先駆的なものであり、昭和49年の「第四紀地殻変動図—近畿（50万分の1）」にまとめられています。その一方で、六甲山を中心に阪神間諸都市域の地質調査を進められてもいます。大阪湾全域にわたる音波探査によって大阪湾底の地下構造、特に沖積層の分布を示され、古淀川の埋没谷の存在などを明らかにされてきま

した。平野域の地下地質解明のためボーリング資料の集積と分析から見出された沖積層分布や上町断層の存在とその評価などを進めてこられました。これらの成果を神戸・西宮・大阪などの各種地質図・市史などに著され、一般にも広く示すこともなされてきました。現在、これらの資料は大阪地盤図や現在の地盤データベースへと発展し、都市地質学・災害対策調査・研究の基礎的な位置づけとなっております。これら一連の研究から、西南日本の山地・盆地の地形配置が約 200 万年前から現在に至る第四紀の地殻変動の結果であることを実証し、「日本列島砂山論」・「日本の山地形成論—地質学と地形学の間」・「アジアの変動帯—ヒマラヤと日本海溝の間」・「アルプス・ヒマラヤからの発想」などを著されました。日本の第四紀構造地質学の確立・発展への大きな貢献から、昭和 61 年度には秩父宮記念賞を受賞されました。

六甲山地を中心とした近畿地方の詳細な地質・地形学的調査から数々の活断層を見出されてきました。編者の一人として著された「日本の活断層」・「新編日本の活断層」は全国一律基準での活断層分布・活動度を総括した画期的な出版物といえます。平成 7 年兵庫県南部地震後は兵庫県阪神地域活断層調査委員会委員長として阪神・淡路地域の活断層調査を指揮し、総括されました。

理事長として運営された断層研究資料センターは土木・建設・地質調査関連企業に対して地域地質・活断層資料を提供し、さらに講演会・現地見学会を開催し、学術・実業をつなぐとともに社会教育の場としての役割をも果たしてきました。

以上のように、先生は第四紀構造地質学を基盤とする研究・教育のみならず、地域社会貢献に尽くしてこられました。先生の主催される各種の会合では、地質学だけでなく地形学・地球物理学・地震学・応用地質学・工学などの多様な領域の方々が一同に会うことが多く、多角的な観点で議論が行われていたことを感じております。

私の学生時代、先生は教壇でも時おり海外学術探検や中国での断層調査のスライドなどを見せていただいたこと、地学教室の野外地質見学で中央構造線に沿って長野県伊那地方から秋葉街道を巡った際、地質構造と地形の関係を現地で実感させていただいたことなど、大山脈形成・第四紀の地殻変動のダイナミクスをご教示いただきました。学生であった私は胸を躍らせて聞きながら、フィールドで発想する大切さを学ばせていただきました。大学で研究を続けるようになってからも、断層研究資料センターで催される各種の会合に参加させていただいた際には、関連する多分野の研究者との交流を持つ機会を与えていただいたことを深く感謝しております。

ここに謹んで哀悼の意を表し、心からご冥福をお祈り申し上げます。

(大阪市立大学・三田村宗樹)

◆地質標本館 春の特別展 「五百澤智也 山のスケッチとフィールドノート」

スケッチを描くこと、それは対象をよく観察することに他なりません。地形学、地質学の研究者にとってスケッチとは、単に景色を写し取るだけではなく、淡い地層境界や岩盤の色合いなど、写真だけではわからない情報を正確に読み取る高度な調査技術なのです。

国土地理院OBで地理学者、地図作家である五百澤智也氏の鳥瞰図とスケッチは、地形研究者の科学的な視点と、地形図作成技師としての高い描画技術に裏打ちされた科学画です。研究テーマである氷河地形を中心に、山のなりたちが読み取れるように描かれています。

特別展「五百澤智也 山のスケッチとフィールドノート」では、作品の科学的な側面にスポットを当てます。精密に描かれた鳥瞰図と山の地形・地質の解説を並べて展示し、鳥瞰図に描かれた地形・地質のなりたちを紹介します。また、ヒマラヤ山脈の氷河観測で使われたフィールドノートを展示し、研究対象を正確に記載してその成り立ちを考える研究者の視点を伝えます。

展示期間：2009年4月14日（火）～7月5日（日）

展示協力：千葉県立中央博物館

展示内容：

- 五百澤智也の世界（入替展示）
 - I期（4/14～5/10）北アルプスの山々
 - II期（5/12～6/7）東北の山々
 - III期（6/9～7/5）ヒマラヤの山々
- 鳥瞰図と地質情報
- ヒマラヤのフィールドノート

関連行事：

地質標本館特別講演会

4月19日（日）13:30～15:00 産総研・共用講堂

原山 智（信州大学）「地質探偵ハラヤマと探る槍穂高連峰の生い立ち」

地質標本館特別講演会と展示解説

5月10日（日）13:30～15:00 地質標本館映像室

長谷川裕彦（明治大学）「氷河の痕跡を探せ！ ー北アルプスの氷河地形調査ー」

15:10～15:40 長谷川裕彦博士による展示解説

（独）産業技術総合研究所 地質標本館

〒305-8567 茨城県つくば市東1-1-1 中央第7

電話 029-861-3750/3751 FAX 029-861-3746

交通のご案内

（電車・バス）

つくばエクスプレスつくば駅、JR 荒川沖駅西口、JR 東京駅八重洲口からバス

「並木二丁目」下車 徒歩約5分

（車）

常磐高速道「桜土浦IC」から国道354号、県道55号（学園東大通り）経由で約5分

（お車でお越しの際は、産総研正門の守衛所で入構証をお受け取りください）

◆第 53 回粘土科学討論会

主催：日本粘土学会

共催：資源・素材学会、資源地質学会、ゼオライト学会、地盤工学会、日本化学会、日本火山学会、日本鉱物科学会、日本セラミックス協会、日本セラミックス協会原料部会、日本第四紀学会、日本地学教育学会、日本地球化学会、日本地質学会、日本土壌肥料学会、日本熱測定学会、日本ペドロロジー学会、農業農村工学会、岩手大学工学部（予定）

会期：2009年9月10日（木）～11日（金）

会場：岩手大学 学生センター棟および人文社会科学部 5号館
〒020-8550 岩手県盛岡市上田三丁目 18-8

講演：

A. 一般講演：口頭発表、ポスター発表、提案型セッション

B. 特別講演：齋藤徳美（岩手大学 副学長）予定

C. シンポジウム

一般講演の申込：

申込方法：本討論会より、討論会への参加申込みならびに講演要旨の提出を Web から同時に行います。ただし、Web からの申込みを利用できない場合、参加申込書に必要事項を記入し、講演概要・講演要旨と併せて下記申込先へご送付願います。なお、講演 1 件ごとに申込書、講演概要、講演要旨をお送りください。講演概要はプログラム編成に利用しますが、併せて日本粘土学会ホームページに討論会プログラムとともに公表しますことをご了承ください。なお、発表者の内 1 名は本学会会員であることが必要です。

日本粘土学会 HP アドレス：<http://www.soc.nii.ac.jp/cssj2/index.html>

申込期間（Web）：2009年6月23日（火）14:00～7月7日（火）14:00

Web 申込後に確認の返信をしますので、返信が届かない場合はご連絡ください。

申込期間（郵送）：2009年6月23日（火）～7月3日（金）必着

参加登録料：会員（共催学会員を含む）3,000 円、学生会員 1,000 円、非会員 5,000 円

講演要旨集代：3,000 円

懇親会：9月10日（木）18:30～

ホテルルイズ（〒020-0034 岩手県盛岡市盛岡駅通 7-15、TEL：019-625-6211）

会費：一般 6,000 円、学生 3,000 円

懇親会参加申込書を参照の上メール、FAX または官製はがきにて、下記申込先にご送付願います。

見学会：見学会は開催致しませんのでご了承ください。

問い合わせ、討論会・懇親会申込先、講演要旨送付先：

〒020-8551 岩手県盛岡市上田四丁目 3-5

岩手大学大学院工学研究科フロンティア材料機能工学専攻

第 53 回粘土科学討論会実行委員会 成田榮一・平原英俊・會澤純雄

TEL & FAX:019-621-6331 または 019-621-6333 E-mail:aisawa(at)iwate-u.ac.jp

◆富山大学極東地域研究センター教員公募

- ・所属：富山大学極東地域研究センター
- ・職名：准教授あるいは講師
- ・専門分野：北東アジアにおける環境変動に関わる分野（理学）

詳細は富山大学の公募文書をご覧ください。

公募の詳細は、<http://www.u-toyama.ac.jp/jp/employ/index.html>

センターの詳細は、<http://www3.u-toyama.ac.jp/cfes/indexJP.html>

協力講座の詳細は、<http://www.sci.u-toyama.ac.jp/earth/index-j.html>

締め切りは平成 21 年 6 月 30 日

◆ 2009 年度地球化学研究協会学術賞「三宅賞」および「奨励賞」候補者を募集

当協会会員及び関連諸学会会員によるご推薦の何れでもお受けします。下記の要領でご応募下さい。

—地球化学研究協会理事長 石渡良志—

2009 年度地球化学研究協会学術賞「三宅賞」および「奨励賞」候補者の募集

1. 三宅賞

対 象 : 地球化学に顕著な業績を修めた研究者

表彰内容: 賞状、副賞として賞牌および賞金 30 万円、毎年 1 件 (1 名)

2. 奨励賞

対 象 : 2009 年 4 月 1 日の時点において 40 才未満で、地球化学の進歩に優れた業績を挙げ、将来の発展が期待される研究者

表彰内容: 賞状および賞金 10 万円、毎年 1 ~ 2 件 (1 ~ 2 名)

3. 応募方法: 地球化学研究協会のホームページからダウンロードした申請書に、略歴・推薦理由・研究業績などを記入し、主な論文 10 編程度 (三宅賞)、2 編程度 (奨励賞) を添えて、下記のあて先へ送付して下さい。応募書類等は、三宅賞及び奨励賞選考のためにのみ選考委員会などで用いられます。

4. 締切日: 2009 年 8 月 31 日

5. 地球化学研究協会ホームページ: <http://wwwsoc.nii.ac.jp/gra/>

6. 応募先: 〒 100-8212 東京都千代田区丸の内 1-4-5
三菱 UFJ 信託銀行リテール受託業務部公益信託グループ
(公益信託) 地球化学研究基金 江川康治

7. 問合せ: 地球化学研究協会事務担当まで、電子メールでお願いします。
E-mail: eitaro1939@yahoo.co.jp または t-sagi@t-m3.gyao.ne.jp

◆ Active Tephra in Kyushu, 2010 のお知らせ

日本第四紀学会の研究委員会であるテフラ・火山研究委員会は、2010 年 5 月に国際第四紀学連合 INQUA の一組織である International Focus Group on Tephrochronology and Volcanology (INTAV) の活動として、九州 (霧島市) にて “International Field Conference and Workshop on Tephrochronology, Volcanism and Human Activity: Active Tephra in Kyushu, 2010” と題する国際野外集会を企画しました。

詳細は、1st circular: <http://www.ris.ac.jp/intav-jp/index.html> をご覧下さい。

長岡信治 (日本第四紀学会テフラ・火山研究委員会委員長)

電話 095-819-2305

FAX 095-819-2290

E-mail: shin@nagasaki-u.ac.jp

◆東京地学協会 IYPE（国際惑星地球年）記念行事「地球とハーモニー」 講演とコンサートの夕べ

IYPE（国際惑星地球年）記念行事として、東京地学協会は「地球とハーモニー」講演とコンサートの夕べを開催いたします。これは一般市民を対象に、講演とコンサートを楽しんでいただき、地球科学の成果をアピールしようという趣旨です。日本第四紀学会も後援しております。会員の皆様のご参加をお待ちしております。

2009年5月2日（土） 16:00-20:00
日本大学カザルスホール（東京お茶の水）にて

** 講演 **

横山祐典（東京大学）温暖化気候の海面上昇—地球科学データからの将来予測
＜2008年日本第四紀学会学術賞受賞者＞
石川直樹（写真家）地球を旅する
＜七大陸最高峰最年少で登山、北極から南極まで人力で移動＞

** ティータイム **

＜お茶とお菓子が出ます＞

** コンサート **

（ピアノとヴァイオリン演奏）定兼三紀子・大内田奈名子・武内俊之
ラヴェル、フランク、ベートーヴェンなどの作品

入場無料、ただし事前申し込み制です。

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/tokyogeo/news/0000000076.html>

日本地球惑星科学連合ニュースレター（JGL）
2009年1月号の最終ページにもお知らせを掲載しています。
<http://www.jpogu.org/publication/>

★★★ 第四紀通信に情報をお寄せ下さい ★★★

第四紀通信の原稿は随時受け付けております。
広報幹事：苅谷愛彦（kariya (at) isc.senshu-u.ac.jp）宛にメールでお送り下さい。
第四紀通信は奇数月上旬原稿締め切り、偶数月1日刊行予定としていますが、情報の速報性ということから、版下が出来た段階でホームページに掲載するよう努力しています。奇数月15日頃にはホームページにアップするようにしていますのでご利用下さい。

日本第四紀学会広報委員会 専修大学文学部環境地理学研究室 苅谷愛彦
〒214-8580 川崎市多摩区東三田2-1-1 電話：044-911-1014 Fax：044-900-7814

広報委員：越後智雄・糸田千鶴 編集書記：岩本容子

日本第四紀学会ホームページ <http://wwwsoc.nii.ac.jp/qr/index.html> から第四紀通信バックナンバーのPDFファイルを閲覧できます。

日本第四紀学会事務局
〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町519番地 洛陽ビル3階
E-mail：daiyonki(at)shunkosha.com 電話：03-5291-6231 FAX：03-5291-2176

日本第四紀学会会員の皆様へ

第四紀通信 16 巻 2 号に以下の記事（◆日本地球惑星科学連合 2009 年連合大会プログラムの一部）を掲載する予定でしたが、編集過程のミスにより欠落しております。お詫び申し上げますとともに、ここに追加いたしますので、ご確認下さい。

セッション S147『活断層と古地震』オーラルセッション

5 月 21 日（木）13:45～17:00 国際会議室

- 13:45～14:00 大内 徹 地震断層のダイナミクス(2)－単純ずりとゼロモード変形－
 14:00～14:15 工藤 健・河村 将・古本宗充 活断層の活動間隔について
 14:15～14:30 林 豊・前田憲二 主要活断層帯の古地震発生履歴を説明する更新過程の統計モデルの比較
 14:30～14:45 宮内崇裕 変動帯に発達する海成段丘の波状変位が示す地殻変動は地震性？
 14:45～15:00 遠田晋次・丸山 正・吉見雅行 岩手・宮城内陸地震に伴う地表地震断層のトレンチ調査
 15:00～15:15 武村雅之 関東大震災における神奈川県足柄下郡片浦村での土砂災害再考
 15:15～15:30 休憩
 15:30～15:45 都司嘉宣 大阪府交野市小松寺の古代の四度の地震記録
 15:45～16:00 安藤広一・山崎晴雄 断層撓曲の発生条件とメカニズム-立川断層を事例として-
 16:00～16:15 杉山雄一・新谷加代・宮脇明子 群列ボーリングによる関東平野北西縁断層帯櫛挽断層・神川断層の活動性
 16:15～16:30 吉村辰朗 γ 線測定で検出した破碎幅による活断層評価－警固断層および宇美断層を事例として－
 16:30～16:45 松本 剛・新城竜一・中村 衛 琉球島弧・石垣島東方沖海底活断層の発達・伝播過程
 16:45～17:00 林 愛明・任 治坤 2008 年中国文川（Wenchuan）地震の地震断層の変位量分布と短縮構造

セッション S147『活断層と古地震』ポスターセッション

5 月 20 日（水）幕張メッセ国際会議場ポスター会場 コアタイム 17:15～18:45

- 1 上田圭一・澤田昌孝 横ずれ断層系の変位に伴う地盤表面の非脆性変形-断層模型実験による基礎的検討-
- 2 林 舟・金田平太郎・向山 栄 日本の山地における植生下の微小活断層地形の検出～根尾谷断層および駄口断層における高密度航空レーザ測量
- 3 重野聖之・石井正之・七山 太 メガトレンチ掘削による津波痕跡調査（予報）
- 4 大津 直・田村 慎・川上源太郎 地中レーダとトレンチ法による 1938 年屈斜路地震断層の検討

- 5 鈴木啓明・今泉俊文・石山達也 十勝断層帯北部のセグメント結合に関連した中期更新世における河川の流路変遷
- 6 土井宣夫・齋藤徳美・野田 賢 2008年岩手・宮城内陸地震の地震断層系の特徴
- 7 佐々木俊法・上田圭一・青柳恭平 2008年岩手・宮城内陸地震震源域における地表変状の特徴
- 8 丸山 正・遠田晋次・吉見雅行 地上型 LiDAR を用いた地震断層の詳細マッピング：2008年岩手・宮城内陸地震に伴う荒砥沢ダム北方の地震断層
- 9 田代祐徳・今泉俊文・石山達也 一関-石越撓曲を横断する反射法地震探査
- 10 小坂英輝・田代祐徳・三輪敦志 一関-石越撓曲および周辺地域の活構造
- 11 宍倉正展・田村 亨・渡辺和明 仙台平野南部の海浜堆積物に記録された過去約500年の相対的海面変動
- 12 渡辺和樹・宮内崇裕 第四紀後期海成段丘の高度分布と断層モデルに基づく佐渡島大佐度山地の隆起プロセス
- 13 田中麻衣・小林健太 新潟県中越，鳥越断層群とその周辺地域の構造史
- 14 伊藤達哉・豊島剛志・渡部直喜 2004年新潟県中越地震震源域周辺における地下水異常
- 15 道家涼介・竹内 章・関 牧仁 跡津川断層系の古地震学—特に単位変位量と完新世の活動性について—
- 16 稲崎富士・相澤隆生・伊東俊一郎 ランドストリーマー高分解能反射法による呉羽山断層の浅部変形構造調査
- 17 井上卓彦・村上文敏・岡村行信 能登半島北部沿岸海域における活断層の分布と発生頻度
- 18 八戸香奈依・宮内崇裕 化石石灰藻による古地震復元の試み—相模トラフを震源とする巨大地震サイクルに関連して—
- 19 遠田晋次・丸山 正・奥村晃史 糸静線活断層系釜無山断層群の完新世断層活動
- 20 杉戸信彦・澤 祥・谷口 薫 糸静線活断層帯中南部，富士見町御射山神戸における断層変位地形の発達史
- 21 松多信尚・田力正好・廣内大助 糸魚川～静岡構造線活断層帯中部，白州地域の Lidar 測量を利用した活断層線と変位速度
- 22 田力正好・澤 祥・杉戸信彦 糸魚川～静岡構造線活断層帯南部，白州～鰺沢付近の変動地形
- 23 吉岡敏和・廣内大助・杉戸信彦 高山・大原断層帯，牧ヶ洞，江名子，宮川およびヌクイ谷断層の活動履歴
- 24 田中俊行・田力正好・野崎京三 手賀野断層周辺の地下構造
- 25 丹羽雄一・須貝俊彦・大上隆史 濃尾平野完新統に記録された急激な相対的海面上昇と地震性沈降の関係
- 26 池田倫治・後藤秀昭・堤 浩之 中央構造線活断層系伊予断層の最新活動時期と活動間隔
- 27 越後智雄・小俣雅志・郡谷順英 宮古島断層帯における第四紀の活動性調査
- 28 近藤久雄 北アナトリア断層系・1942年地震断層における非固有地震的挙動
- 29 Ramos Noelynna・堤 浩之・Perez Jeffrey Seismotectonic implications of uplifted coral reefs in the Philippines: A preliminary report